

翁問答（おきなもんどう）

〔異称〕 書名は外題による。首題・序題ともに同じ。

〔書型〕 大本五卷五冊。天地二六五^ミ。

〔作者〕 中江藤樹作・序。

〔年代〕 寛永一七年（一六四〇）作。慶安二年（一六四九）一〇月刊。「京都」勘右衛門板。

〔内容〕 天君と称する老師と門弟の体充（^{ていじゅう}牀充）の問答に仮託して綴った教訓。収録した第一巻は「人間一生涯のうち、いづれの道をか受用のわざとなすべく候や」という体充の問いに対して、「至徳要道」という生得の宝を心を守って五倫の道を行うべきこと、そして、この宝を求めて学ぶことが「儒者の学問」であり、この教えは貴賤男女の違いなく「本心」ある人ならば誰もが実践できる道であると述べ、以下、「孝行の条目」たる五倫の道について順々に論ず。第一巻・第一四丁以下、父母の恩徳や子どもに対する慈愛を述べたくだりに子育てに関する記述が見え、胎内十月より出産を経て「乳哺三年」に至る父母の苦勞、さらに入学後の慈愛など、父母の広大無類の恩を説き、それに報いる孝行は数々あるが詰まるところ、「父母の心の安楽なるようにすること」「父母の身をよく敬い養う」ことの二つであるとする。さらに子どもに対する親の愛情に触れた後、子孫の教育は幼少時が根本であること、真の教育が徳教にあること、八歳以降は『孝経』を読ませて大意を説き、一五歳以上には師匠と友を選ぶべきことなどを論ず。

〔備考〕

第一巻の全てと第五巻の刊記を収録。なお、本書は藤樹が門人に書き与えたもので、まもなく書肆の手に渡り寛永二〇年に無断で出版されたが、藤樹は不満のある著作として書肆に申し入れて絶版にさせた。書肆が板木の損失を甚だ嘆いたために、代わりに女訓書の『鑑草』を与えて出版させたという（市古夏生「近世における重板・類板の諸問題」『江戸の出版』）。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『藤樹先生全集』『中江藤樹・熊沢蕃山（日本の名著一一）』『中江藤樹（日本思想大系二九）』『翁問答（岩波文庫）』『子育ての書・一』は抄録。【影印】なし。

女式目（おんなしきもく）

〔異称〕 書名は外題による。目録題・尾題ともに同じ。

〔書型〕 大本二巻合一冊。天地二六〇^ミ。

〔作者〕 最登被留（中野弥兵衛）作。

〔年代〕 万治三年（一六六〇）二月刊。「京都」中野弥兵衛板。ただし底本は刊年の記載がある『儒仏物語』を欠くため刊年不明。

〔内容〕

本来は『女式目』二巻に『儒仏物語』一卷を合わせた三巻三冊本で、寛永一四年（一六三七）刊『女訓抄』や慶安三年（一六五〇）刊『をむなかゝ見』に次いで古い初期の女訓書（仮名草子）。上巻には「うへくゝの上臈方の作法」以下、「町人などの女房」「みやづかへの女房」「町人などにつかふる女房」「おなじくお乳うば」「尼」などの各種作法と、「女子おさなき時よりそだてやうの作法」「もろこしのしうげんの作法」「五常の次第」「五倫の次第」「五戒の次第」までの十一章、下巻には「女とりわけ手ならひし給ふべき事」「文かき給ふべき上中下の次第」「文ことばおなじやうなる事あらまし」の三章を収録する。上巻では女性の礼儀作法・心得、女子の養育や五常・五倫、五戒・十悪など儒仏の教えについて論ず。下巻は、女子の手習いや手紙の作法・用語など日常生活に必要な教養を主とする。本書は『をむなかゝ見』の影響が色濃く、例えば下巻第二章の女性書札札なども同様の主張を展開するが、より具体的な記述が目立つ。大半が仮名書きの本文中に、「下々おほくめしつかい給ふてい」「びくに物かたりのてい」「しうげんのざしきのてい」など八葉の挿絵を掲げる。再刊本に『貞節教訓女式目』の題簽を付した寛延四年（一七五二）板（後掲）や宝暦四年（一七五四）板があり、序文や挿絵が一新された。

〔備考〕 女子教育に関する記述が随所に見られるため、全て収録した。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕

〔翻刻〕『仮名草子集成・一一』『江戸時代 女性生活絵図大事典・一』『子育ての書・一』は抄録。なお、『日本教育文庫・女訓篇』は後掲『貞節教訓女式目』の宝暦四年板を底本としている。【影印】『往來物大系・八一』『往來物分類集成・R四一』『往來物分類集成Ⅱ・R二』。

〔異称〕 書名は外題による。原題簽角書には「みさほきやうくん」とルビを付す。目録題・尾題ともに「女式目」。

〔書型〕 大本二卷二冊。天地二七〇^ミ。

〔作者〕 最登被留（中野弥兵衛）作。

〔年代〕 寛延四年（一七五二）七月求板。「京都」加賀屋卯兵衛板。

〔内容〕 前掲・万治三年（一六六〇）板の序文・目録・挿絵等を一新したもの（本文は同内容）。

〔備考〕 本書は稀観書で、これまで影印に付されることがなく、さらに、万治板との異同箇所も目立つため、全て収録した。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】『日本教育文庫・女訓篇』。【影印】前掲・万治三年板『女式目』参照。

〔異称〕 書名は外題による。目録題および柱題「女五経」。尾題「あかし物語（明石物語）」。

〔書型〕 大本五卷合一冊。天地二六三^ミ。

〔作者〕 小亀勤斎（益英・叔華・三左衛門・益奥・嘉琴）作。

〔年代〕 延宝三年（一六七五）初刊、元文六年（一七四一）求板。「大阪」丹波屋伝兵衛板。

〔内容〕 第一卷「あかし物語・春秋」、第二・三卷「詩経」、第四・五卷「礼記」から成る女訓書（仮名草子）で、全体を『女五経』と銘打つ。第一巻から第三巻の前半部までは、明石入道の娘（姫君）と公家の大臣との恋愛小説で、『源氏物語』『岩屋の草子』『中将姫本地』などを下敷きにしたもの。また第三巻後半部に、女房達に語った姫君の話を通じて『礼記』に基づく男女のあり方や『列女伝（劉向列女伝）』に見える貞女・賢女の例を紹介する。第四巻では女子三従を主とした教訓と『列女伝』に登場する悪女の例について述べ、第五巻では「女礼儀の事」以下、衣類、女子の身持ち・心入れ、遊山・遊興、娘・妻・後家の心持ち、女子教育、女性の悪行、宮仕え等について論ず。特に「女子におしゆべき事」では、七歳からの手習いや読むべき女訓書（『堪忍記』『智恵鑑』『女四書』『本朝女鑑』『仮名列女伝』『三綱行実』、嗜むべき諸芸等について述べる。

〔備考〕 女子教育論に触れた第五巻の全部と表紙・冒頭部を収録した。なお、本書の板種には延宝三年板を最初として、延宝九年板（松会板・梅村板等）、元文六年板（丹波屋板）があり、さらに『大阪出版書籍目録』によれば、安永四年（一七七五）に『女五経益鑑』の書名で再刊された。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】『仮名草子集成・一〇』。【影印】『江戸時代女性文庫・二』『霞亭文庫（マイクロフィルム版）・R七一』。

やまと小学（やまとしょうがく）

〔異称〕書名は外題による。首題・尾題「倭小学」。柱題「小学」。

〔書型〕大本六卷五冊。天地二六七^ミ。

〔作者〕辻原元甫（省・橘軒散人・沙木子）作・跋。

〔年代〕明暦四年（一六五八Ⅱ万治元年）七月跋。万治二年（一六五九）二月刊。「江戸」黒河四郎兵衛尉、「京都」埜田弥兵衛開板。

〔内容〕朱熹の指示を受けて劉子澄が編んだ『小学』の主旨を邦訳したもの。万治三年刊『大和小学』（山崎闇斎作＊後掲）と書名が類似するが全くの別内容で、各巻に教葉の中国風俗画を挿む点でも異なる。序に、『小学』は「その理におゐては、おのれをおさめ、人ををさむる道を具足」したもので熟読玩味すべき書物だが、「一文不通の輩、女わらんべの類」には原文のままでは読みかねるので、それを「諺解」、すなわち平易・通俗的な和文に改めたと記す。卷之一は「立教篇第一」で、最初に大意・概略を述べたうえ各論に入っていく。以下同様にして、卷之二「明倫篇第二」（父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の五部および通論）、卷之三「敬身篇第三」（心術・威儀・衣服・飲食の三部）を読み明かし、さらに卷之四「稽古篇第四」（立教・明倫・敬身三篇にふさわしい「いにしへの聖賢のおこなひ」を集録）、卷之五「嘉言篇第五」（同三篇の「みちをおしひろめ」するための嘉言を集録）、卷之六「善行篇第六」（同三篇の道理を証明するために、漢・宋代の賢人の事跡を列記）の三篇によって例証する。

〔備考〕胎教や男女・年代別教育について論じた第一巻（第一冊前半部）の全てと第六巻（第五冊）の一部を収録した。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】『江戸時代女性文庫・二二』。

大和小学（やまとしょうがく）

〔異称〕書名は外題・首題による。柱題「小学」。題簽題は第一冊から順に「大和小学立教」「大和小学明倫 君臣」

「大和小学明倫 父子」「大和小学明倫 夫婦・朋友・長幼」「大和小学敬身」。

〔書型〕大本五卷五冊。天地二七五^ミ。

〔作者〕山崎闇斎（嘉右衛門・敬義・垂加翁）作・序。

〔年代〕万治三年（一六六〇）二月刊。「京都」上村四郎兵衛板。

〔内容〕序に『小学』こそ人のさまなれば、男のみならはんかは。されど、まなしらぬ女はよみがたかるべし。そのさまをかなにやはらげよとて、しゐられにける筆のちからもなく…とあるように、いわゆる朱子の『小学』に和漢の故事を増補し敷衍した仮名書きの儒学入門書。『小学』は内篇（立教・明倫・敬身・稽古）と外篇から成るが、本書は立教・明倫・敬身の三編の構成である。例えば「立教」篇では『列女伝（劉向列女伝）』の「胎教」に基づき乳母の選定、幼児教育、寝などから説き起こすように、『小学』のうち特に婦女子に必要な箇所重点を置く。「明倫」篇では五倫のあらましを述べ、うち「夫婦」部では「娶らざる五婦」や「七去・三不去」、その他和漢貞女の説話を紹介する。「敬身」篇では、冒頭で「身体は家屋、心はその家の主」という譬えから「敬」を説明し、さらに和漢の故事・金言等から縷々論し、末尾で各神社の祭神に言及して締め括る。

〔備考〕胎教や幼児教育に触れた第一巻の全てと第五巻の刊記部分を収録した。なお、本書の後印本には元文二年（一七三七）板や文化八年（一八一二）板がある。また、前掲・万治二年刊『やまと小学』は本書とは別内容である。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『山崎闇斎全集・続下』『日本教育文庫・教科書篇』。【影印】『往来物大系・八五』『往来物分類集成Ⅱ・R二』『家政学文献集成・続編江戸期Ⅰ』。

婦人ことぶき草（ふじんことぶきぐさ）

〔異称〕書名は外題による。序題・目録題・首題・尾題「婦人寿草」。

〔書型〕大本六卷六冊。天地二五八^リ。

〔作者〕香月牛山（則真・啓益・貞庵・披髮翁）作・序。坂部調堅序。

〔年代〕元禄五年（一六九二）七月作。宝永五年（一七〇八）六月刊。「大阪」大野木市兵衛板。

〔内容〕例言にあるように、和漢の典籍によって「婦人嗣^きをもとむるの術より、妊娠十月の間の保養、産後百日までの撰養の事共」を平易な仮名交じり文で綴った絵入りの産育書で、女子用往来を始め後続の類書に多大な影響を及ぼした。適宜、漢語に左訓を施したり、難解な引用部を割注で説明するなど「世俗日用」に徹した記述だが、典拠を示しつつ諸説を紹介したり、自説も加えながら産育全般にわたって詳述する。ただし、俗間における薬の誤用を恐れて、「求嗣産前後の薬方」を意図的に排除する。内容は、第一巻が「求嗣の説」以下四章、第二巻が「子を求めるの術」以下五章、第三巻が「胎教の説」以下一〇章、第四巻が「妊婦胎を下し、并産を断の説」以下八章、第五巻が「妊婦臨月撰養の説」以下四章、第六巻が「産後調護の説」以下五章の計三十六章から成る。うち第三巻では、『列女伝』等を引きながら「胎教の説」から説き始め、「妊婦食忌の説」「妊婦棄忌の説」「妊婦胎を驗^{しら}るの説」「胎内の児男女をしろの説」「胎内の児男女をしろの算法の説」「女を転じて男となすの説」「妊婦腰腹に帯をまとふ説」「産前諸病の説」「胎^た自^{おのずから}墮^{おちる}の説」までを載せる。

〔備考〕胎教や妊婦の心得を説いた第三巻の全てと、刊記を収録した。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『婦人ことぶき草（療原書店）』『臨床漢方婦人科叢書・四』。【影印】『江戸時代女性文庫・二九』『婦人ことぶき草（出版科学総合研究所）』。

和俗童子訓（わぞくどうじくん）

〔異称〕書名は初板本の外題による（再刻本の外題は「童子訓」）。序題・首題・尾題「和俗童子訓」。柱「童子訓」。

〔書型〕半紙本五卷五冊。天地二二六^リ。

〔作者〕貝原損軒（篤信・益軒）作・序。

〔年代〕宝永七年（一七一〇）四月作・刊。「京都」永田調兵衛板。

〔内容〕本邦最初の体系的な教育論。第一巻「総論上」、第二巻「総論下」、第三巻「随年教法・読書法」、第四巻「手習法」、第五巻「教女子法」の五巻からなる。第一・二巻の「総論」では、まず「いとけなき時より、早くよき人にちかづけ、よき道ををしゆべき事にこそあれ」と本書の教育原理たる「先入主となる」故の「予めする」教育について繰り返し述べ、「はやくおしえる」と「左右の人をゑらぶ」ことを子育ての原則とせよと説き、読み書きから学問など具体的な教育方法にも言及する。さらに第三巻の「随年教法」では発達に応じた読・書・算の教育や礼法躰方、また反復学習の重要性などを説き、六歳から二〇歳までの年齢別教育の概要を簡潔に述べるほか、同巻後半の「読書法」では、「経（聖人の書）」と「伝（賢人の書）」を読むべきこと、読書の心構えや方法、読書の学習順序・方法、少年時代に徹底して学問すべきことを教える。また第四巻の「手習法」では、書論や書道教育のあらましを述べ、末尾で「世間通用の文字」と仮名遣いや「てに（を）」は「を知る必要を論ず。最後の「教女子法」は女子教育や女性心得の要点を一八カ条にまとめたもので、益軒死去の前後に、後人（大阪書肆・柏原屋清右衛門か）の手で「女大学」に改編されたことで知られるが、七歳以後の読み書き教育や「男女の別」、また「四行」「三従」「七去」等の女徳、嫁入りする娘に父母が教えるべき一三カ条、「女の五病」等について説く。

〔備考〕全冊を収録。なお参考までに、本書改刻本の安永二年（一七七三）板の一部を収録した。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『養生訓・和俗童子訓（岩波文庫）』『貝原益軒（日本の名著）』『大和俗訓・和俗童子訓（中公文庫）』『日本教育文庫・学校篇』『益軒十訓（有朋堂文庫）』『子育ての書・二』は抄録。【影印】『女大学資料集成・一』。

貝原先生 家訓（かいばらせんせい かくん）

〔異称〕 書名は外題による。首題「貝原先生家訓」。柱題「家訓」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二八^ミ。

〔作者〕 貝原益軒（篤信・柔斎・損軒）作。赤松勲（蘭室・大業・太郎兵衛）序。

〔年代〕 貞享三年（一六八六）作。寛政五年（一七九三）序。寛政六年一月刊。「大阪」播磨屋新兵衛板。

〔内容〕 益軒が子孫のために綴ったとされる家訓で、「聖^{せい}学^{がく}須^{すべ}勤^{からくつ}」^勤「幼^{よう}児^じ須^{すべ}教^{からくつ}」^教「士^し業^{ぎふ}勿^な怠^た」の三章二〇カ条から成る。まず「聖学須勤」では、聖人の教えを学び努める志を立てる「聖学」の大意や、己を誇り人を侮る「矜^{きやう}」は「天下の悪徳」であり、逆に智を開き善に進むための徳たる「謙」は「天下の美德」であると説く。また「幼児須教」では「随年教法」など『和俗童子訓』同様の教育論を展開し、「小児ははやく教^{おし}べし」「後には善事をおしへても移らず」と述べ、小児には偽りを教えたり、脅して臆病の癖を付けさせたりしてはならないこと、年齢と性質に応じた具体的な教育方法（読み・書き・算盤、諸芸等）や先祖崇拜などについて教える。さらに「士業勿怠」では、武士の職分や日常生活での基本的心得（儉約、文武両道、忠孝勤儉）を諭す。後文で、貝原家では一五歳になったら以上の家訓を代々相伝すべきことを述べる。なお、本書は益軒作ではなく、後人による偽作とする説もある。

〔備考〕 全冊を収録。なお『大阪出版書籍目録』は「大川太郎平校訂」とするが、赤松太郎兵衛の誤りか。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『日本教育文庫・家訓篇』『益軒十訓（有朋堂文庫）』『子育ての書・一』は抄録。【影印】なし。

増補多人 小児必用記（ぞうほえいり しょうにひつようき）

〔異称〕 書名は外題および柱題による。序題「小児養育草^{そだてぐさ}」。首題および目録題「小児必用養育草^{そだてぐさ}」。

〔書型〕 半紙本六卷六冊。天地二二七^ミ。

〔作者〕 香月牛山（則真・啓益・貞庵・披髮翁）作。香月秀房（五平子）・杏三折序。

〔年代〕 元禄一六年（一七〇三）八月、香月秀房序。正徳四年（一七一四）三月、杏三折序。同年五月刊。「大阪」秋田屋市兵衛ほか板。

〔内容〕 秀房序文に「初生よりの養育と痘^{いも}疹^{はしか}のこと、および十歳までの教誡^{おしえ}をつまびらかにしるせり」とあるように、小児誕生から養育、小児病とその療法、年代別教育法まで幅広く記した本邦初の体系的育児書。第一巻は「小児養育の総論」以下一二章で、誕生から乳児養育までの心得や、出産直後の薬剤や臍の緒の断ち方、産湯・湯浴み、乳付け、乳母、小児衣類・産衣等について。第二巻は「生子養育の説」以下七章で、産髪・宮参り・髪置き、飲食・食い初め、小児諸病等。第三巻は「小児諸病の説」のみ。第四巻は「中花^{ちゅうか}・我国共に痘瘡^{いも}初めて流行するの説」以下一五章、第五巻は「痘瘡収醫の時節善悪の説」以下六章で、大半が「痘瘡（天然痘）」に関する記事。第六巻は「小児物を見知る時よりの教の説」以下五章で、小児の遊戲や教誡について。特に第六巻では、物を見分けるようになった頃からの教えを順々に説き示し、「拍子^{うちごし}」「振頭^{かぶり}」の由来や意義、『礼記』等に見える食札や男女の返事の仕方、小児遊戲の意義、さらに読み・書き・算盤や諸芸、礼儀作法など五、六歳以後の年代別教育法（貝原益軒の「随年教法」よりも早い）までを懇切丁寧に述べる。最後に、いかに傍若無人の振る舞いをなす「地下^{じげ}がかり」の子どもでも良く教えれば善良になるのであり、子どもが善良でない責任は全て父母の教育にあると指摘し結んでいる。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『日本教育文庫・衛生及遊戲篇』『子育ての書・一』は抄録。【影印】『江戸時代女性文庫・四』『臨床漢方小児科叢書・五』『家政学文献集成・続編江戸期四』。

大和女訓（やまとじょくん）

〔異称〕書名は第一冊外題による。第二冊以降の外題は「やまと女訓」。後編序題「女訓美左古草」。同柱題「みさご草」。同首題「女訓みさご草」。一名「後編大和女訓」。

〔書型〕半紙本五卷五冊（前編「大和女訓」三卷、後編「女訓みさご草」二卷）。天地二二五^ミ。

〔作者〕井沢長秀（蟠竜子・元水叟・亨斎・無名氏）作・序。井沢須賀序（後編）。

〔年代〕前編「大和女訓」は享保五年（一七二〇）一月序・初刊。後編「女訓みさご草」は享保一四年春跋・初刊。文化一四年（一八一七）九月補刻・再刊。〔大阪〕加賀屋善蔵板。

〔内容〕前編の「大和女訓」は、当時流布していた女訓書の大半が「和漢の貞婦の伝」であり、要所を押さえた教戒が少ないことに鑑みて、日本が「女国」たる所以や雛遊び・貝合わせの由来等を述べた絵入りの女訓書。冒頭で「女王国」の意義に触れ、続いて、読み書き以下の女子教育法や嫁入り後の婦人心得を説く一方、和漢の貞婦・愚婦の例を挙げつつ諸教訓へと展開する。また前編下巻は、作者不明の一書によって雛遊び・貝合わせ・羽根突き・鏡台・七夕祭り・亥子餅の故事やその典拠を記し、所々、自説を披瀝したものであるが、その多くは寛延二年（一七四九）刊『雛遊の記・貝合の記』（度会直方作）にそのまま受け継がれた。一方後編の「女訓みさご草」は、前編「大和女訓」の遺漏を補った女訓書で、上巻では「女子は閨中へのみ居て端ちかく出ることなかれ」との教訓を始め、礼儀、婚姻（嫁迎え・嫁入り）、夫への服従、分限、嫉妬、夫婦和合などを故事や教訓歌を用いて論し、下巻では、寸暇を惜しんで芸能を学ぶべきことから説き始め、婦人の職分（家政）、自慢の戒め等を記すほか、和漢の賢女・貞女の小伝を引きながら縷々心得を述べる。

〔備考〕全冊を収録。本書は『家内用心集』（第四卷所収）上巻末「人々読で益有書物之大概之事」に掲げられた唯一の女訓書である。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【影印】『江戸時代女性文庫・二三』『家政学文献集成・続編江戸期一』。

【翻刻】なし。【影印】なし。

官刻
六諭衍義（かんこく りくゆえんぎ）

六諭衍義

〔異称〕書名は外題による。首題・柱題「六諭衍義」。序題「官刻六諭衍義」。跋題「重刻六諭衍義」。

〔書型〕大本二巻合一冊。天地二六五^ミ。

〔作者〕范鋹（声皇）作。荻生徂徠（物茂卿）編（訓点）・序。

〔年代〕享保六年（一七二一）一〇月序、同年十一月刊。〔江戸〕須原屋茂兵衛ほか板。

〔内容〕『六諭』は、明の太祖（洪武帝）が洪武三十一年（一三九八）に発布した『教民榜文』四一カ条中の「自治章程」の一条で、「孝順父母」「尊敬長上」「和睦鄉里」「教訓子弟」「各安生理」「母作非為」の六条に及ぶ庶民生活心得である。この『六諭』に関連法令の条文や故事・例話・詩などを交えて平易に解説したものが『六諭衍義』で、もともと琉球で中国官話（公用語）の学習用に編まれた程順則の『程氏本六諭衍義』（一七〇八年、中国福建省で刊行）が、享保四年三月に島津吉貴によって幕府に献上されたところ、將軍吉宗はこれを庶民教化に役立てようと室鳩巢にその和解を命じ、荻生徂徠には訓点を施すように命じた。本書は前者和解本の『六諭衍義大意』に先立って出版された徂徠の訓点本で、冒頭に享保六年一〇月の徂徠序、康熙四十七年（一七〇八）四月の竺天植（程順則の恩師）序、次いで范鋹自序を掲げ、末尾に范鋹自跋、康熙四十七年の程順則跋までを翻刻する。程順則本とは本文の字配りが異なるほか、程順則本の巻頭にあった「上諭十六条」も省かれた。本邦では本書を嚆矢とし、さらに享保七年刊『官刻六諭衍義大意』の刊行によって国内に広く普及し、藩版・民間版など明治初年まで多数出版された。第四条「教訓子孫」では子弟教育の重要性が説かれている（本条の内容は次項『六諭衍義大意』参照）。

〔備考〕第四条「教訓子孫」の全文と冒頭部や奥付等を収録した。なお、初板本の題簽題は「官刻六諭衍義」であったが、後に板木が書肆に下賜され「賜板六諭衍義」と角書が改められた。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】なし。

官刻 六諭衍義大意（かんこく りくゆえんぎたいい）

六諭衍義大意

〔異称〕書名は外題による。首題「六諭衍義大意」。

〔書型〕大本一冊。天地二六一ミ。

〔作者〕室鳩巢（直清・師礼・汝玉・滄浪・駿台）作・序・跋。石川柏山（信義・園智・罔昭・勘介・勘助）書。

〔年代〕享保七年（一七二二）四月刊。〔江戸〕須原屋茂兵衛ほか板。

〔内容〕享保六年刊『官刻六諭衍義』とともに将軍・吉宗の命によって庶民教化用に編まれた官刻の往来物。『六諭衍義大意』は程順則本『六諭衍義』に平易な和解を試みたもので、『六諭衍義』のうち当代の実情に合わない「律例（法度の箇条）」と「古人の事跡」を省き、その「大略をとりて、和語をもて、是をやはらげ」たとの編集経緯を述べた鳩巢自序（享保七年二月）および自跋と「大意」本文からなる。全体として書道手本用に書かれており、その版下書きも江戸の能書・石川勘助に命じられた。収録した第四条「教訓子孫（子孫を教訓す）」は、家の盛衰が子孫の善し悪しによるが、それを決めるのが教訓であり、幼時より父兄に使えること、年長者を敬うこと、言葉を偽らないこと、起居進退を静かにすること、何事にも怠らないこと、人と交わるには礼儀正しくすべきことなどを教え込むことが肝要であると説く。なお『兼山麗澤秘策』に述べるように、本書は最初から往来物として編集されたものであり、刊行直後から江戸町奉行・大岡忠相によって江戸の手習師匠へ褒賞品として下賜されるなど、幕府の奨励により庶民教育の基本図書と見なされ急速に普及した。

〔備考〕第四条「教訓子孫」の全文と、表紙く冒頭部や奥付等を収録した。なお、初板本は江戸および京都で「官刻」として出版され、寛政一年（一七九九）以後「賜版」となり、天保十五年（一八四四）にも再板された。また、秋田藩・掛川藩・名古屋藩・萩藩・岩村田藩・福山藩・伏見藩・柴山藩の藩板や古山代官板、河村奉行板、明倫堂板、桑折代官板、奥州白石・石津氏施板など明治期を含めた板種は六〇種を超える。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『日本道德教育叢書・五』『日本教育文庫・訓誠篇』『近世町人思想（日本思想大系五九）』『日本教科書大系（往来編）・五』。『子育ての書・二』は抄録。【影印】『往来物大系・三五』。

家内用心集（かないようじんしゅう）

〔異称〕書名は外題による。見返題・序題・柱題・首題ともに同じ。

〔書型〕半紙本三卷三冊。天地二二四ミ。

〔作者〕頓宮笑月（咲月・寂照軒・忠（仲）左衛門・正則）作・序。柳枝軒（茨城多左衛門）跋。

〔年代〕享保一四年（一七二九）十一月（冬至）跋。享保一五年一月刊。〔京都〕茨城多左衛門板。

〔内容〕家内の和合・不和も、家業の出精・懈怠も、世間交際の善し悪しも、貧富によらない満足も、全て心の用い方次第であることから、家族や店員のために平易ですぐに読める箇条別の心得として綴った教訓書。単に精神面だけでなく、実務的なノウハウに関わる内容も含み、上巻表紙見返しには、農工商の三家が常に座右の書として家業の暇に熟読することを薦める。上巻には「夫婦の用心」「男女に別ある用心」「家を持つ用心」「金銀のつかひ用心」「子弟に教へ用心」「兄弟の中用心」「家人つかひやう用心」「言語の用心」「火の用心」「出火の節用心」「病の用心」「看病人の用心」「盗人の用心」「人に用心」「客ある時の用心」「客人の用心」「朋友の中用心」「酒宴の用心」「養父母・舅姑の用心」「養子・嫁の用心」「老人の用心」「手代・奉公人の用心」「道中の用心」の二三カ条、中巻には「武士用心」「農人用心」「職人用心」「商人用心」「畢、竟苦楽用心」の五カ条、さらに下巻には毎日家人へ見せるべき「十五ヶ条之事」を収録する。本書は、店主を始め家内一統・老若男女の基本心得を簡潔に説いたもので、子弟教育に関する記事は「子弟に教へ用心」のみだが、他の条々にも子育てに通じる理念や背景が窺える。

〔備考〕上巻の全てと下巻の一部（跋文・刊記）を収録。著者は仙台府下南町の紙商で、本書続編の元文三年（一七三八）作・同五年刊『用心譬喩艸』二巻・附録一卷を著したほか、自ら出資したと思われる版本に享保一六年刊『鎮火用心集（回禄用心集）』（江戸・須原屋次右衛門と仙台・頓宮仲左衛門の合梓）がある。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『家内用心集（生活の古典双書二六）』『日本教育文庫・訓誠篇』『子育ての書・二』は抄録。【影印】『江戸時代女性文庫・六八』『家政学文献集成・続編江戸期一』。

養子訓（ようしくん）

〔異称〕書名は外題による。各巻首題・柱題・尾題とも同じ。

〔書型〕半紙本三卷三冊。天地二二九ミ。

〔作者〕三田義勝（蘭室）作。穂積以貫（伊助）序。

〔年代〕享保一七年（一七三二）一月刊。〔大阪〕河内屋宇兵衛（菅生堂）板。

〔内容〕上巻「総論」、中巻「奉仕（上）」、下巻「奉仕（下）」の三巻から成り、「養子を選ぶこと」「養子を育てること」「養子たる者が父母へ仕える道」を説いた教訓書。序文や凡例に示すように、本書は童蒙が理解できるように俗諺を用いて平易な仮名書きにしてある。諸書から先賢の教えや故事等を拾い集めて自説も披瀝する。上巻「総論」では『古語拾遺』『釈日本記』等によつて養子の来歴や、貝原益軒の養子説などを紹介し、続いて「養育」と題して養父母の心得を述べる。また、中・下巻には「養子の行事」について論じ、養子として上古神代の「正直」の心で「当世時宜の用捨」を弁え分毫の「私心」を持たなければ、いかに頑なな養父でも相和すことができる旨を述べ、養父母の恩は実父母よりも重いことや、養父母に対する孝養、養子としてのふるまいについて論ず。下巻末尾では、「我を損して父母（養父母）を益するのこゝろあるべし。寝ても覚ても、父母のこゝろを察し、己が前日のあやまちを今日はなくし、今日の過ちを明日はなくすべし。且又、義を懷ひて其親を敬し、自己の便利・逸楽をねがふ事なかれ」と、養子の心得を簡潔に説いている。著者は丸亀藩郡奉行三田宗寿の三男（母は井上通女）で、後に丸亀藩儒学兼侍講となったが、宝永八年（一七一）、八歳時に一族・三田勝富の養子となり、一〇数年仕えた。自らを回顧しつつ、「しばしば困難に出くわして過ちを犯すことがあったが、後に自らを省みてその恩に報いようと努めたものの、弱冠（二〇歳）の頃に養父と死別し、その後悔のあまり本書を著した」と語っている。全冊を収録。上巻第一丁表に「尾陽杉ノ町本町東へ入／書林玉照堂／菱屋利兵衛」の蔵書印があるが、『近世書林板元総覧』によれば、菱屋は木村氏で、享和と文化期に活躍した名古屋書肆である。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】なし。

日用重宝

女諸礼綾錦

（にちようちようほう おんなしよれいあやにしき）

〔異称〕書名は外題による。首題・柱題「女諸礼集大全」。見返題・目録題「女諸礼綾錦」。尾題「女諸礼集大全」

〔書型〕「女諸礼集十寸鏡」「女諸礼集」。

〔作者〕大本七巻合一冊。天地二七〇ミ。

〔年代〕北尾辰宣（雪坑斎・仁右衛門）編・画。田千里序。

〔内容〕寛延四年（一七五一）七月初刊、宝暦五年（一七五五）三月再刊。〔大阪〕田原屋平兵衛板。

江戸中期を代表する庶民女性用の礼法書・女子用往来。各種礼法については万治三年（一六六〇）刊『女諸礼集』に基づき、その他の記事や全体の構成を元禄五年（一六九二）刊『女重宝記』にならつて編んだと思われる。口絵・前付に相当する「序の巻」を除いた本文は七巻から成る。第一巻は、「女教真見鑑」「婦人七去の事」など女性教養一般について。第二巻「婚礼の巻」は、「結納の事」以下婚礼儀式全般と婚式後の付随的慣習について。第三巻「懐妊の巻」は、「懐妊か懐妊にあらざるを知る事」以下、産前から産後までの養生や、子どもの養育、通過儀礼について。第四巻「通方の巻」は、「酌取りやうの事」以下、酒食の際の給仕法で、もてなす側（主人方）の礼法。第五巻「飲食給様の巻」は、小項目を立てずに食礼の教えを列挙したもので、前巻に対する客方礼法である。第六・七巻はいずれも「諸芸嗜之巻」で、六巻が手習い、手紙・短冊・色紙の書き方、和歌の心得、七巻が歌がるた・貝覆い、茶道・香道について述べ、末尾に妙薬・染物・裁縫・包み方・大和言葉等の記事を補う。なお序巻には「女十芸の図」から「源氏短歌」まで種々の記事を収録する。このように本書は、『女諸礼集』から庶民に縁遠い内容を削除し、逆に、女子教訓や生活心得、また教養・諸芸など『女諸礼集』に見られなかった内容を大幅に増補した一種の重宝記で、後続の類書の母体となった。

産前後の心得や成人までの通過儀礼を述べた第三巻と表紙・冒頭部・奥付を収録した。

〔備考〕小泉吉永蔵。

〔底本〕

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】『江戸時代女性文庫・四〇』。

文章必用 寺子幼訓往来（ぶんしょうひつよう てらこようくんおうらい）

寺子幼訓往来

〔異称〕 書名は外題による。見返題「寺子宝久種」。

〔書型〕 大本一冊。天地二五八ミ。

〔作者〕 北尾辰宣（雪坑斎）編・画。長友松軒書。

〔年代〕 明和五年（一七六八）以降刊。『大阪』秋田屋良介板。

〔内容〕 『近道子宝』を改編した明和五年刊『幼訓学問 寺子宝久種』の改題本。改題に際して、本文前半部に「寺子千金用文（千金用文）」を追加したほか前付を大幅に増補し、さらに田彫章堂の跋文を含む半丁を改刻した。本文前半部「寺子千金用文（千金用文）」は、四季・五節句など一二カ月の例文と見舞状、算術大成の祝儀状、暴雨時に世話になった礼状、大徳寺見学の仲介依頼状など合計二二通の例文集である。また、後半部が「寺子宝久種」と称する教訓文で、「夫、幼いとしき時よりならひしるべきは、先上をば天と知、下をば地と知。知ものは人、これ則天地人の三才也……」で始まる文章で『近道子宝』と同様の語句や心得を列記するが、集録語彙には一部増減が見られる。例えば、「いろは」四七字や「九九」を本文中に挿入したり、絹布・衣類、薬種、金相場（関東相場）、芸能関連の語彙、また、友を選ぶ心得などを増補する一方、『近道子宝』に見られた具体的な往来物名や食物、神儒仏などの語句を割愛してある。子育てに関しては、本文中の所々に読み・書き・算の学習順序や年代別教育法などに関する記事が散見される。また、前付・頭書等に「本朝聖賢蹟之事」「文房四友」「寺子之六芸」「寺子之四禁」「十二月異名集」「諸札験図式」「年中帖（用文章ではなく年中行事を記した往来）」「鏡くさ（『源氏物語』各帖の名称等を綴った往来）」「朝鮮国尽」「書初詩歌」「七夕詩歌」「四季額字尽」など特色ある記事を掲げる。

〔備考〕 全冊を収録した。また参考までに『幼訓学問 寺子宝久種』の一部（異同箇所等）も掲げた。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕『幼訓学問 寺子宝久種』は『往来物大系・四二』に所収。

町人 身体はしら立（ちようにん しんだいはしらだて）

身体はしら立

〔異称〕 書名は外題による。見返題「町人身体柱立」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二一ミ。

〔作者〕 周防由房作。手島堵庵（信）補（附録）。

〔年代〕 延享五年（一七四八）九月作。明和五年（一七六八）春、堵庵補。明和七年六月刊。「京都」銭屋七郎兵衛・文台屋多兵衛板。

〔内容〕 「始末の工夫」「貧福現在鑑」「子供養育の積り」「凡人間一代酒入用の積」「凡人間一代煙草入用の積」「凡人間一代油元結入用の積り」の六章に分けて商人一生の始末を説いた教訓書。表紙見返しには「此書は、町人孝行のもとたち、屋内中よくなり、渡世楽々と出来やすく、一切の氣病の根ざりをする妙術をしるせり」と紹介する。生涯に要する各種費用を示した上で日々の始末の重要性を説くのが特徴で、例えば子育てについて、一二歳までに要する養育費を「下品（下流）」の子供は二貫三五二匁二分八厘余、「中品（中流）」の子供は七貫五六匁八分、「上品（上流）」の子供は二〇貫九六九匁八分三厘という具合に見積り、さらに正確には、閏月を考慮したり、髪置・袴着・嫁入・婿入等の通過儀礼や病氣その他の思いがけない出費も計算に入れる必要があると説く。本書後半は堵庵による補足で、本書前半の心得が単に貨殖を旨とすると考えるのは誤りであること、そして、始末の根本は「正直（ありべかり）」であり、正直・本心の土台があつて初めて「身体柱立」も万全に行われることを論ず。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『心学道話全集・四』。〔影印〕なし。

生涯肝要章（しょうがいかんようしょう）

- 〔異称〕 書名は外題による。首題「生涯の肝要」。
- 〔書型〕 特大本一冊。天地二七五_ミ。
- 〔作者〕 月相（知足庵六二歳）作・書。
- 〔年代〕 明和八年（一七七二）七月書。
- 〔内容〕 主として子育てする者の立場から親孝行を論じた教訓。まず、人間の肝要も、儒仏の教えの根本も、全て「孝」の一字に尽きること、また、親が孝を尽くせば子も自然と孝行者に育つのであって、これこそが「子を教えるの妙術」であると説く。さらに、老親を捨てようとした時に、子の元覚が「その籠を持ち帰れば父を捨てる時に役立つ」と述べた言葉によつて父が不孝を悟った故事を引いて、子どもはとかく親の姿を真似るものであり、親自身が良き模範たるべきことを論ず。
- 後半部に収録の手紙例文集は割愛した。
- 〔備考〕 小泉吉永蔵。
- 〔底本〕
- 〔文献〕 【翻刻】なし。【影印】なし。

前訓絵抄（ぜんくんえしやう）

- 〔異称〕 書名は外題および柱題による。
- 〔書型〕 中本二巻合一冊。天地一八〇_ミ。
- 〔作者〕 手島堵庵作。
- 〔年代〕 江戸後期刊。刊行者不明。
- 〔内容〕 『手島堵庵先生事跡』によれば、前訓は安永二年（一七七三）二月から月三回（三・一三・二三日の八時半時）、七〜一五歳の男児と七〜一二歳の女児を集めて、親孝行など「御幼稚様方御行作よろしく御成り候為の御教え」を説いた手島堵庵の講話そのものを指し、その際に配布された各回の講話要旨（後述の各章単位の冊子）をまとめて一冊にした出版物が『男子・女子前訓』（安永二年八月初刊）である。収録書は『男子・女子前訓』の本文に挿絵を施したもので、安永板の本文とは随所に異同がある。安永二年板『前訓』の基本構成は、上巻の男子用「口教」（四章二〇カ条）と、下巻の「女子口教」（一章五カ条）および、附録の「司馬溫公家範・婦人六徳和解（柔順・清潔・不妬・儉約・恭謹・勤労）」から成るが、男子の口教は女子も用いるべきであり、女子の口教は男子も同様にわきまえるべきことを論ず。「男子口教」では、起床後の神仏礼拝、祖父母や父母に対する挨拶や返事、正直、遊び事や殺生、無礼な言動、男女の別、友の善悪、他人への嘲笑、目下への体罰、衣食への小言、両親への従順、毎月のお灸、身の養生、善悪の報い、悪と気付いたことを口にし行わないことを教え、「女子口教」では「男女の別」や「三従」「四徳」「舅姑・夫への献身」等を説く。
- 〔備考〕 全冊を収録。
- 〔底本〕 小泉吉永蔵。
- 〔文献〕 【翻刻】『前訓』本文は『日本教育文庫・心学篇』『日本道德教育叢書・八』『石門心学（日本思想大系四二二）』『心学道話全集・四』に収録。『子育ての書・二』は抄録。【影印】なし。

道得問答（どうとくもんどう）

〔異称〕書名は外題による。

〔書型〕半紙本四卷四冊。天地二二三ミ。

〔作者〕慈音尼兼葭作・序・跋。

〔年代〕安永三年（一七七四）一月序・刊。〔大阪〕菊屋安兵衛ほか板。

〔内容〕序文に「（石田梅岩）先生の申おかれし言葉の端々覚記したる反古や、又我等に人來たりて問とき先生の答のはづれくおぼへしるしたるあらましを以て答申たる反古や、亦、我等先生に問とき答の反古や、又人來て問とき愚が心にうかむにまかせて答申たる反古や、色々さま／＼取集て予が非を知、少しのたよりにも、又は同志の門人・童蒙・初学の人の此身のまゝにてたることをしる毫釐の端にもと思ひたつ比は十月廿二日の夜半なり」とあるように、それまで書きためたメモを整理して四卷にまとめたのが本書である。各卷を四段程度（二卷のみ七段）にまとめ、第一卷冒頭「八歳にして母におくれ、夫より菩提心にこゝろざすの段」から起筆しているが、彼女が石門心学に出会った時の感動やその後の修行の来歴など自叙伝的な性格も持つ。子育てについては、第二卷の半ば「子共の養育様を教之段」で触れ、「子供の善悪は全て因縁で、子供の教育は不要ではないか」という人の質問に対する梅岩の回答を載せる。人間の本性は善であるゆえ、教えれば悪人も善人になるのであり、心を尽くしてわが子を育てることは人の道であること、また、我が子といえども「天の子」であり、主君に仕える道と子を養育する道は「天命」という点で全く同一であることなどを論し、さらに、「前方に用心して教ゆる慈愛は、末の禍ひをおもふゆへ」であり、若年の時から子供に苦勞させることが大切であると教える。

〔備考〕

第二卷の「子共の養育様を教之段」と、第一卷冒頭および第四卷末尾をそれぞれ抄録した。なお本書は、宝暦六年（一七五六）刊『兼葭反古集』の改題本という。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕〔翻刻〕『日本道德教育叢書・四』『心学道話全集・五』『日本教育文庫・心学篇』。『子育ての書・二』は抄録。【影印】なし。

我津衛（わがつえ）

〔異称〕書名は外題による。序題・目錄題・首題・尾題とも同じ。柱題「我杖」。

〔書型〕半紙本三卷三冊。天地二三〇ミ。

〔作者〕手島堵庵（信）作・序。布施矩道序。上河洪水跋。

〔年代〕宝暦九年（一七五九）一月自序。明和七年（一七七〇）八月、布施矩道序。安永四年（一七七五）五月刊。

〔京都〕循古堂蔵板。海老屋弥兵衛ほか売出。

〔内容〕本書は、自序に「常々宿老にきけること、耳にとゞまり、腹に記して、日用予が杖とし、世の中をわたるたすけとなし侍れば、また、予に志を同ふする子孫もあらば、見て便ともなれかしとおもふまゝ、拙を忘れて筆をとり侍ることしかり」と記すように、日頃身近な古老から聞いた訓話などを書き集めたもので、家業守成の秘訣が様々なテーマで説かれている。上巻には「主人心得の話」「家来心得のはなし」「親の身にとりて心得のはなし」「子の身にとりて心得のはなし」「夫の身にとりて心得の話」「妻の身にとりて心得の話」「女子に養ひ婿を貰ふ心得の話」「養子息男となる人の心得の話」「嫁養子などにやるに親心得の話」「使ふ人を傷はぬ心得のはなし」「金銀貯へる心得のはなし」の一一話を収録する。このうち「親の身にとりて心得のはなし」や「女子に養ひ婿を貰ふ心得の話」等に年代別教育法など若干の子育て論が見えるほか、養子についての心得も含まれる（第四卷所収『養子訓』と比較されたい）。

上巻の全てと下巻の跋文・刊記等を収録した。

〔備考〕小泉吉永蔵。

〔底本〕

〔文献〕〔翻刻〕『日本教育文庫・心学篇』『手島堵庵全集』。『子育ての書・二』は抄録。【影印】なし。

子もりうた（こもりうた）

〔異称〕 書名は外題および序題による。首題「子守歌」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二一^ミ。

〔作者〕 知真庵義観作。手島堵庵（信）序。

〔年代〕 江戸中期刊。「京都」炭屋勘兵衛ほか板。

〔内容〕 堵庵序に本書は「俚諺鄙事なりといへども、これ即道心微妙の赤子を撫育するの奇術なり」と述べ、作者も「嬰兒の時より善に親しみ、不善になれたる事をねがひて」執筆したという。「子もりうたをば、うたふて聞しや、うたへばよいく、よい子になるぞ、其子何処にと、たづねて見れば、何所どこに居るやら、無明の闇で、ありかしれねど、余所よそではないぞ…」のように七七、七七と続く調子の良い文章で綴った教訓で、何度も「反復咏歎」することによって孝悌に導くことを意図している。本来善良な子どもの心が徐々に穢れていく様子を述べ、正直・正路を心掛け、主人や親の恩の重さに思いをいたし、小欲、儉約、慈悲、菩薩行、さらに子育てに当たる父母の心得、家業出精、学問成就、宗旨・法度・家法の遵守などを説く。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】『日本教育文庫・心学篇』『子育ての書・二』。【影印】なし。

本心近道

真一文字（ほんしんちかみち まいちもんじ）

〔異称〕 書名は外題による。首題および尾題「本心近道真一文字」。

〔書型〕 半紙本二卷二冊。天地二二五^ミ。

〔作者〕 正山翁編・序。下河辺拾水画。

〔年代〕 安永一〇年（一七八一）一月刊。「京都」菱屋治兵衛（福寿軒・陵花堂）板。

〔内容〕 享保一四年（一七二九）刊『女家訓』（保井怒庵編・西川祐信画）の挿絵を一新し、序文を改めた改題本。『女家訓』は中江藤樹の『鑑草』を平易かつ簡潔に書き改めた絵入りの女訓書で、幸福な一生を送るために掲げられた「八の理」、すなわち孝逆・守節・不嫉・教子・慈残・仁虐・淑睦・廉貧の八条目をよく弁えて「心を善にうつして身をつゝしみ守る」べきことを論ず。『鑑草』に見える多くの説話から各条目毎に一話ずつを抄出して、締め括りに『鑑草』とほぼ同文の寸評を付す。収録書は『女家訓』と同じ本文の所々に孝徳・婦順・貞節・嫉妬・養育・教子・慈善・残悪・寛仁・淑睦・正直の一一題をモチーフにした挿絵（『女家訓』とは絵柄が異なる）を挿入したもので、三巻本と二巻本（底本）の二様があるが、まず『女家訓』を模刻した三巻本が刊行され、後に、本文の行数・挿絵等を改めた二巻本が出版されたものと思われる（刊記はいずれも安永一〇年）。子育てについては、上巻第二三丁表から下巻第四丁裏の「教子（子に教ゆる）」の段に述べられており、「教子」とは我が子によく道を教えて、その心を明らかに正しく養い育てることであり、我が子を愛するならば「天下第一の宝」、すなわち万人が生まれながらにして持っている「明德」に気付かせ、それを明らかにすべきで、親たる者は目に見えぬ心をよく養い育てるように心掛け、成人後の教えにも良き師匠につけて儒道を学ばせ、書物を多く読むことに専念させ、神道や仏教を侮り譏ることをかたく戒めよと述べている。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】本書と内容の『女家訓』は『日本教育文庫・女訓篇』に収録。『子育ての書・一』は抄録。【影印】『女家訓』は『江戸時代女性文庫・三九』に所収。

授業編（じゅぎょうへん）

- 〔異称〕 書名は外題による。序題・首題・柱題・尾題ともに同じ。
- 〔書型〕 半紙本一〇巻五冊。天地二二六ミ。
- 〔作者〕 江村北海（綬・君錫・伝左衛門）作。山村良由・朱鳳（子鸞）・北山彰（橘庵・元章）序。
- 〔年代〕 天明元年（一七八二）九月序説。天明三年一月、山村良由序。同年二月、朱鳳序。同年六月、北山彰序。天明三年五月刊。『京都』菱屋孫兵衛ほか板。
- 〔内容〕 専ら童蒙のために卑近俗事の語で学問の概要を述べたもの。第一冊巻頭の「序説」では「此書ノ主意ヲイハバ、オヨソ世ノ書籍文字ニタヅサルホドノ人、其ノ言トコロ、為トコロ、多ク一偏ニカタヨル。余コレニ感激シテ、此編ノ草ヲ起ス：初学ノ模範トモナスベカラズ。サレド其言ノ、ゲニモト思フ事モアラバ、エラミ採テ芸文ノ考索ノ一助トモセヨカシ」と述べ、読者が各々用捨すべきと説く。巻構成は、第一巻「幼学」「習句読」「学書」、第二巻「読書」、第三巻「訓点」「吳音漢音」「四声五音」「韻鏡反切」「唐音」、第四巻「教授」「講經」「講釈」「書生之学」「講談」、第五巻「歴史学」「諸子学」、第六巻「作文」、第七・八巻「詩学」、第九巻「寿賀」「寄題詩文」「地名」「和習」、第一〇巻「姓氏」「名字号」「称呼」「著書」「藏書」「闕疑」から成る。うち全文を収録した第一巻では、まず幼学は『小学』を学ぶことに尽きるが、ほかに『司馬溫公家誡』など中国の家訓・家誡・童蒙訓の類、本邦では貝原益軒の『童子訓』なども薦め、以下、幼時からの読書習慣や読み書き教育の方法、また素読の法、書字（手習い）の法について述べる。また第二巻では、学問の方法の全てとも言うべき読書の「三則」を説く。その一は読書が学業成就の根本であること、その二は読むべき書物の次第、その三は「読書百編義自ずから通ず」のように熟読玩味すべきことを論ず。
- 〔備考〕 第一冊（第一・二巻）の全部と第五冊（第九・一〇巻）の一部を収録。なお凡例では、全二〇巻刊行の予定だったが、前半一〇巻のみが上梓され、残りは未刊に終わった。
- 〔底本〕 小泉吉永蔵。
- 〔文献〕 【翻刻】『日本教育文庫・学校篇』。『子育ての書・二』は抄録。【影印】なし。

父兄訓（ふけいくん）

- 〔異称〕 書名は外題による。扉題・目次題・首題ともに同じ。
- 〔書型〕 中本一冊。天地一三〇ミ。
- 〔作者〕 林子平作・序。板倉勝明編。
- 〔年代〕 天明六年（一七八六）九月自序。江戸後期（後述）刊。『安中藩』造士館蔵板。
- 〔内容〕 主として、「人の土台」とも言うべき「孝・悌・忠・信・勇・義・廉・恥」の八徳に基づいて、父兄たる者に子弟教育の基本を論じた書。子平によれば、多くの父兄は「八徳」を知らず、単に「姑息の愛」のみで子どもに接し教訓も加えないために、子々孫々まで「勝手次第」に育つという。「人の善悪・実不実は生まれつきではなく、専ら父兄の教訓や育て柄による。子弟の善悪・邪正も、一分は生まれつきでも、九分までは父兄の責任である」と強調し、父兄の教育は胎教から始まるとする。そして、八徳に基づく子育てとして「父兄や長者の言うことをよく聞いて違背せず、義理と恥を専らにして、物事に骨惜しみしない」などの具体的事項を順々に説く。また、子どもをみだりに叱り罵るべきでないことや、親自らが襟を正すべきこと、さらに、心の持ちようや年代別の教育法、学問や武芸の習わせ方、衣食その他の生活心得までを詳述する。
- 〔備考〕 全冊を収録。底本は「甘雨亭叢書・別集」に収録された「未定稿の欠本」（大槻修二）とされるものである。「甘雨亭叢書」は安中藩主・板倉勝明編纂の叢書（全七集・別集二集、五六冊）で、江戸期の碩学三〇余人の著作六〇余点を集録、弘化二年（一八四五）から安政三年（一八五六）にかけて刊行された。江戸期に刊行された『父兄訓』は本書のみだが、今日伝わる各種写本と相当の異同がある。なお付録として、伊勢斎助編、大槻修二校『父兄訓 附録小児養育草舎』（大正一三年版）を収録した。
- 〔底本〕 小泉吉永蔵。
- 〔文献〕 【翻刻】『日本教育文庫・訓誡篇』『林子平全集・二』『子育ての書・二』。【影印】なし。

世わたり草（よわたりぐさ）

〔異称〕書名は外題による。首題「世和多理草」。柱題「世渡草」。

〔書型〕半紙本一冊。天地二二八^ミ。

〔作者〕菊屋彦太郎（柴田彦太郎・繁脩）作。美年遠序。蝸亭跋。

〔年代〕天明八年（一七八八）九月作・跋。同年一〇月序。寛政元年（一七八九）二月刊。「江戸」大和田安右衛門ほか板。

〔内容〕二人の乳飲み子を残して妻に先立たれた後、子どもの養育と家業（腹葉等の販売）のかたわら、「世の物しりの人々、或は父母たちのものがたり共」を拾い集めて子孫のために書き残した教訓書。美年遠の序文には「其言は浅近にして其忠告のふかきをあふぎしたがはざらんや」とある。まず「百行の本、教えの第一」である「孝」の概要を述べ、次に、親子関係や親の心得に触れ、子育てには「奢り」と「忝なる事」を早く戒め、とりわけ友を選ぶことが肝要であると説く。また、「奉公人は親に仕えるごとく勤めよ」「主人は家内の模範たるべし」「博奕の類は一切厳禁にせよ」「若者には暇を与えるな」「分限を守り、美麗を好まず、何事も事前に準備せよ」「先祖の祭りを怠るな」「養生を心掛け病を予防せよ」「主人や親には礼儀を弁えつつも老若の隔てなく友達のごとく接せよ」「妻を娶るには心立てと親の行いと家法を吟味せよ」「分相応の善事・陰徳に努めよ」「商人は信頼を大切にし、正直・儉約を心掛け、利欲を貪るな」「思慮し難い事柄は分別ある人に相談せよ」など種々の町人心得や処世訓を綴る。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『日本教育文庫・心学篇』。『子育ての書・二』は抄録。【影印】『江戸時代女性文庫・五三』。

女訓（じょくん）

〔異称〕書名は首題および序題による（題簽は後簽）。

〔書型〕大本三卷合一冊。天地二三七^ミ。

〔作者〕福井敬斎（軌・小車・衣笠山人）作・序。

〔年代〕寛政三年（一七九一）六月序・書。

〔内容〕上臈の巻・中臈の巻・下臈の巻の三巻から成る女訓書。まず上臈の巻では、上流婦人の心得として、たとえ天子の姫宮でも諸侯に嫁いだ後は、婦道を守って舅姑や夫に仕えよと諭し、経典や故事を引きながら婦道や女徳について概説し、以下、「夫君に事ふ」「舅姑に事ふ」「子を育ふ」「貞節を守る」「内事をつとむ」の五章を述べる。また中臈の巻では、孝婦・順妻のありようを示して、「夫につかふ」「舅姑につかふ」「子を育ふ」「媳をそだつ」「貞節を守る」「内事」の六章、さらに下臈の巻では夫婦和合・婦道の大切さや「貞静純一」を述べたうえで、「夫につかふ」「舅姑につかふ」「子を育ふ」「貞節を守る」の四章を説く。身分別の婦道を説いた点に特色があるが、全ての女性に共通する心得を随所で述べる。各巻ともに子育てについて触れ、上臈の巻では胎教、乳母・傳母の選び方、七歳以降の読み書き・諸芸教育・学問について説き、中臈の巻では、夫を大切に敬うように娘を育てるためには、母親が父親を軽んじないこと、継子の育て方（実子よりもいとおしく思い接する）、娘には早く「心の教」や婦道を学ばせるべきこと、男女の別を守るべきことなどを述べる。さらに下臈の巻では、富家のような女子教育はならずとも幼時より行儀や言葉遣いを教え、七、八歳からは読み書き教育をさせ、祖父母・父母・兄弟を敬うべきことや飲食の行儀などを授け、手習いのほか紡績・裁縫等の家事を身につけさせ、婦道を学ばせよと諭す。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】なし。

久世条教（くせじょうきょう）

〔異称〕書名は序題および柱題（序のみ）による。

〔書型〕半紙本一冊。天地二二五^ミ。

〔作者〕早川正紀（八郎左衛門）作。小寺清光序。

〔年代〕寛政一年（一七九九）三月作。同年四月序・刊。〔作州久世〕典学館板。「大阪」浅野弥兵衛売出。

〔内容〕江戸時代後期の名代官・早川正紀によって設立された幕府代官地最初の教諭所である美作国久世の「典学館」（一七九五年）や、備中国笠岡の「敬業館」（一七九八年）で農民教化に用いられた教訓書。「勸農桑（のうそうをすすむ）」「敦孝弟（こうていをあつくす）」「息争訟（そうしやうをやむ）」「尚節儉（せつけんをたつとぶ）」「完賦税（ふぜいをまっとうす）」「禁洗子（せんしをきんず）」「厚風俗（ふうぞくをあつくす）」の七カ条からなる。このうち第五・六条を除く五カ条は、中国清の聖祖が康熙九年（一六七〇）に通達した『康熙聖諭』一六カ条にならったものである。早川正紀は、疲弊・荒廃した地域の復興のために教諭所を建てて、本書を月三回民衆に教諭したという。久世などに見られた堕胎・間引きの悪風を改めるために、特に「禁洗子」の一条を盛り込み育児を奨励したもので、本条では「天の三光（日月星）が日夜怠りなく運行を続け、地が陰陽寒暑の狂いなく往来して五穀・草木・禽獣を始め万物を生育してくださるのも、全て子である人間に対する無限の恵みである。このように我が子をあわれむのが天の道である」ことを教え、また「どんなに貧しい家庭でも、母の乳房が二つあれば二人の子どもは養えるものである。しかし三つ子では乳房も不足することから、相応の養育費が支給される有難い世の中になっている。このように、公儀では赤子一人ですら大切になさるのに、本当の親でありながらわが子を殺すことは言語道断の悪事である」と述べて、間引きが天地の道に背く行為であることを戒める。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文獻〕【翻刻】『吉備文庫・五輯』。『子育ての書・三』は抄録。【影印】なし。

条教談話（じょうきょうだんわ）

〔異称〕書名は外題および柱題による。

〔書型〕半紙本一冊。天地二二八^ミ。

〔作者〕早川正紀（八郎左衛門）作。斉藤数山補注・序。小寺清光序。

〔年代〕天保五年（一八三四）五月序・刊。〔上州か〕斉藤数山蔵板。

〔内容〕寛政一年（一七九九）三月刊『久世条教』に斉藤数山（正紀の閣僚として働き、後、天保頃上州地方の代官となった）が補注を加えて出版したもの。寛政一年四月の小寺清光の序文とともに『久世条教』の全文を掲げ、本文の随所に解説を施す。本書によれば、早川代官は春と秋の二回に地域を巡回して自ら『久世条教』を庶民に説いたが、当時、早川代官に付き従っていた斉藤数山は、早川代官の死後四半世紀も経たないうちに風俗がふたたび廃れ、『久世条教』の名前も忘れ去られるに至った状況を嘆き、地域再興には『久世条教』以上の書物はないとの信念から本書の出版に及んだ。例えば「禁洗子」では、『久世条教』の本文の後、「数山曰く：」と続けて「このような悪習は美作国に限らず関東にもある。わが子を愛し育てるのは、天が万物を育てるのと同じ人間として当然の情である。わが子を愛する心があればこそ、他人の子どもも大切にできるのであり、たとえ小さな虫でも殺すまいという気持ちになれるのに、わが子を殺すとは、禽獣にも劣る行為であり、そのような親は必ず災難に遭う。たとえ子どもが多くていったんは困窮するといっても、子どもが成長するに従い、相応の稼ぎもするようになり、程なく困窮からも立ち直れるものである。とりわけ百姓には子沢山が望ましい。あちこちに荒れ地があるのは人手不足にほかならない。それだからこそ、上野国甘楽郡では小児養育のお手当を長年下さってきたし、最近では吾妻郡でもそのような支給が始まった所である。このような公の補助もあるのであるから、間引きなどは決してしてはならない」という趣旨を述べている。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文獻〕【翻刻】『日本経済叢書・一六』『日本経済大典・二三』。【影印】なし。

女幼学（おんなようがく）

〔異称〕書名は外題による。

〔書型〕大本一冊。天地二六〇ミリ。

〔作者〕雅雁作。田山敬儀（源ゆきのり・元良・順吉・淡斎）画・序。獅子拳書。

〔年代〕享和三年（一八〇三）一月刊。〔京都〕大橋仁兵衛・灰方伊兵衛板。

〔内容〕「それ人はじめて胎内にやどりてより十月の間、母の労したまふ事大方ならず…」で始まる文章で、まず、出産から保育、また成人までの一連の教育に関わる親の苦勞・慈愛とその高恩を記し、続いて、女子の心掛けとして、婉順、孝行、女子三従、慈悲、交友、舅姑への孝養、男女の別、家政・内治・儉約、先祖崇拜・信心、恪気、陰徳などを説いた往来。子育てに関しては、襦袢から二、三歳までの心づくしの養育、六、七歳から始まる読み書き、礼儀、紡績・裁縫の教育などに注がれた親心を中心に述べ、嫁ぐまでの短期間に女性の教養や嗜みをしつかり身につけることを論ず。巻頭に「孝貞誠慈愛図画（千代能媛ほか）」「桜に孔雀の図（敬儀詠歌）」を掲げる。

〔備考〕全冊を収録。本書は数本が発見されているが、刊年を明記するは底本のみである。同書は奥付とは別版で「享和三年亥閏正月新彫」と刷り込まれており、再刊以降は刊年の刷り込みが省略されたものと思われる。また、表紙見返しから始まる一丁半（挿絵二葉）は四色刷りである。なお、本書に「百人一首」を増補した改題本に文化八年（一八一二）刊『女幼学操艸』がある。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕なし。【影印】『江戸時代女性文庫・九二』『往来物分類集成Ⅱ・R一三』。

〔文獻〕

【翻刻】なし。【影印】『江戸時代女性文庫・九二』『往来物分類集成Ⅱ・R一三』。

父子訓（ふしくん）

〔異称〕書名は外題による。見返題・序題・首題・尾題も同じ。

〔書型〕半紙本二卷二冊。天地二二五ミリ。

〔作者〕中村弘毅（梅華）作。若槻敬序。

〔年代〕文化四年（一八〇七）十一月序。文化八年一月刊。〔京都〕岩崎卯之三郎・葛西市郎兵衛板。

〔内容〕上巻「父之部」、下巻「子之部」から成り、父の心得（「慈」に集約される）と子の心得（「孝」に集約される）を併せて説いた教訓書。まず「父之部」では、父親たる者は「慈」、すなわち「子ををしへて、人の道をしれるまことの人」となすことが根本であり、武士なら忠義を励み文武に精通させ、農工商なら各々の家業に出精し、四民ともに父母への孝行、長兄への弟を守り、身を修め、家を保ち、後世に名を残すほどの徳行を身につけるように教育すべきであると述べ、以下、先祖の祭り、胎教、幼時からの教育（概ね『小学』による）、読み書き教育、師を選ぶこと、学問の趣旨、算術教育、家業教育、学問と養生、教えざる親や財産のみを残す親の誤り、母の姑息の愛、父母が模範たるべきことなどを説く。また「子之部」では、子の教えの根本が「孝」、すなわち「よく父母に事る」ことで、孝は「百行の本、万善の先」であると述べ、続いて、胎内に生を宿してから生まれ出た後も昼夜を問わず注がれた「撫育・愛養」の之恩は計り知れず、その報恩を少しでも怠れば不孝となると戒める。さらに、孝行の趣について縷々述べ、身体を損なわないこと、士農工商それぞれに道を尽くすべきこと、幼時の手習い・学問に励むべきこと、父母の心を我が心とし、父母の心を養うべきこと、妻帯後の孝行、孝の字義、父母死去後の葬祭・服忌など、「二十四孝」等の故事を引きながら孝行のあらましを詳述する。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『子育ての書・三』は抄録。【影印】なし。

父母安堵艸（ふぼあんどぐさ）

- 〔異称〕 書名は外題および首題による。
- 〔書型〕 半紙本一冊。天地二一八ミ。
- 〔作者〕 楠見広共作・序。
- 〔年代〕 文化十一年（一八一四）八月序・刊。「和歌山」市井堂藏板。
- 〔内容〕 「父母の十恩」、すなわち、「懷担守護恩」「臨産受苦恩」「生子忘憂恩」「乳哺養育恩」「嘔苦吐甘恩」「洗濯不淨恩」「回乾自濕恩」「意造惡業恩」「遠行憶念恩」「究竟憐愍恩」を敷衍した教訓歌に挿絵を添えた教訓書。冒頭に外典・内典による「孝」の字義と、養育の辛苦と孝行の重要性、また、本書出版の意義を記す。
- 〔備考〕 全冊を収録。
- 〔底本〕 小泉吉永藏。
- 〔文献〕 【翻刻】なし。【影印】なし。

我身のため（わがみのため）

- 〔異称〕 書名は外題による。目録題・首題・柱題ともに同じ。見返題「四民教訓 我身のため」。
- 〔書型〕 半紙本三卷四冊。天地二二五ミ。
- 〔作者〕 無極庵真嗣翁編（校訂）・序。
- 〔年代〕 文政六年（一八二三）夏刊。「京都」細野十右衛門ほか板。
- 〔内容〕 第一冊表紙見返しに「此書は、忠孝の道を専とし、民家日用の務に付て心得となるべき話しを数多集む。人々此書を見てこの教を守り給はゞ、身を修め家をととのへ、子孫繁栄の基となるべし。因て、子童のためにひらがなを以てこれを教へ示すもの也」、また、自序に「惣て民家日用の務に付て、それ／＼の心得ともなりぬべき道話をかいつらねて十巻とす」とあるように、主に町家童蒙向けに綴った教訓書。ただし無極庵の自作ではなく、京都のある商家の隠居が人々との談話で聞いた好話を書き記した遺稿を無極庵の校訂を経て上梓したものである。第一巻は「神道の全体を信ずる心得」以下五章、第二巻は「子を大切に育て、悪く成ざる様の心得の事」以下七章、第三巻（二分冊）は「奉公人をつかふ心得の事」以下六章を収録する。このうち第二巻序章では、ある人の説として子育ての秘訣を紹介する。子育てが肝要であり、子育ての要点として、まず知恵付きの頃より気随・気促、不行儀、驕りから遠ざけ、悪あがきする子どもを気丈と勘違いすべきでないと注意する。町家子弟には行儀・礼節・立ち居振る舞いや、手跡・算盤を第一とし、謡い・読書なども教え、一五、六歳以後は商売の道をひたすら心懸けさせよと説き、世間では分限を超えた衣食を子どもに与える親がいるが、このような溺愛は子どもに有害であると述べ、また、乳母や子守り女に外で子どもに買い食いなどさせぬようにと注意する。さらに子どもを厳しく育てるのは良いが決して折檻してはならないと述べ、さらに養子や継子の育て方にも触れる。
- 〔備考〕 第二冊の全部と第一冊・第四冊の一部を収録。なお、巻末広告では初編（四冊）・中編（三冊）・後編（三冊）と刊行する予定で、中編が天保三年（一八三二）に刊行されたが、後編は未刊に終わったらしい。
- 〔底本〕 小泉吉永藏。
- 〔文献〕 【翻刻】なし。【影印】『江戸時代女性文庫・五四』。

甲申新版 児女長成往来（こうしんしんばん じじょちょうせいおうらい）

児女長成往来

〔異称〕書名は外題および首題による。柱題「児女」。

〔書型〕半紙本一冊。天地二二ミ。

〔作者〕十返舎一九作・序。藍庭玉粒（晋米斎）書。絵題簽は歌川国安画。口絵は歌川豊国三世（歌川国貞初世・一陽斎・香蝶楼・五渡亭・月夜楼）画。

〔年代〕文政六年（一八二三）二月自序・刊記。文政七年刊。「江戸」山口屋藤兵衛板。

〔内容〕文政（一八一八〜三〇）頃に山口屋藤兵衛から出版された、大判の色刷り絵題簽を付した一連の往来物の一つ。「人の生まれ出づるより生涯の事々」（序文）のあらましを述べた往来で、自序に胎内十月の状态から出生後の一〇歳までの子どもの様子を略述する。本文は、ほとんど誕生以後の通過儀礼の名称と関連語の列挙に等しく、枕直し・七夜の祝い・宮参り・喰初め・上巳および端午の節句・紐解き・髪置き・袴着・手習い算盤稽古・遊芸・躰方作法・元服・家督相続・賀養子・近所付き合い・家業出精・女子の婚礼・婚姻後の孝行、さらに初老から米寿の祝い、隠居後の生活までの語句を折々心得を交えながら綴る。「遊芸」の条では女子が武家奉公をするためには無芸では務まらぬ旨が記され、また「行儀作法」では奉公によって社会性が培われることが強調されている。当時の稽古事や他家への奉公の位置づけ、すなわち、当時の町人社会の常識の一端が示されていて興味深い。巻頭に「堪忍袋」の図、頭書に「書札封じ作法」等の書簡作法や「日和善悪のこと」等の記事を載せる。

〔備考〕全冊を収録。絵題簽は四色刷り。なお、刊記には「文政六年」とあるが、実際の刊行は文政七年正月か。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】なし。【影印】『稀観往来物集成・二一』『往来物分類集成Ⅱ・R八』。

絵入 民家育草（えいり みんかそだてぐさ）

民家育草

〔異称〕書名は外題による。首題・柱題も同じ。序題・尾題「育草（育艸）」。

〔書型〕半紙本三卷三冊。天地二二八ミ。

〔作者〕大蔵永常作・序。蕉園老人・六樹園序。

〔年代〕文政二年（一八一九）六月序。文政一〇年一月刊。「大阪」秋田屋太右衛門ほか板。

〔内容〕ある人から「農家の身の行ひ、心のおきどころとすべき事ども」を書いてほしいと要望された筆者が、聖賢の教えなどをたよりに、さらに町家の事柄も書き加えて綴った教訓書。主として庶民上層を対象にしており、諸書からの引用や農家・町家の実話・体験談を紹介しながら平易に説く。上巻では、中流以上の農家・町家に身持ちが悪く家を乱す者が多いのは子育ての失敗にほかならないとし、父の子育ての善悪が子どもの一生の賢愚を決めるとする。いかに利発でも子どもはいわば立木の状態で、成人後に気随・気促が出てきて親の言うことを聞かなくなるため、四、五歳頃から我が侷にならぬように行儀を教えよと論ず。また、民家の学問や諸芸のあり方、礼儀作法や召し使いに対する憐れみ・公平さ、家来からの異見・忠言の重要性について述べる。中巻では、奉公人の使い方、小児の育て方、堪忍、儉約、家職精勤、女の言と家の乱れ、主人の風儀・心得等を説く。下巻では、子どもに早起きさせること、孝行の心を育むこと、民家の学問、母親の愛情、子どもの嘘を厳しく戒め親も約束を守るべきこと、読み書きや智恵より家業を優先すべきこと、身分相応の陰徳等について述べた後、自らを回顧しつつ「誤って改むるに憚る事なかれ」と教えて結ぶ。

〔備考〕全冊を収録。

〔底本〕小泉吉永蔵。

〔文献〕【翻刻】『通俗経済文庫』『子育ての書・三』。【影印】『江戸時代女性文庫・五六』。

道話 自脩編（どうわ じしゅうへん）

〔異称〕 書名は外題および見返題による。序題・目録題・下巻尾題・跋題「自脩篇」。首題および上巻尾題「自脩編」。柱題および中巻尾題「玉川道話」。

〔書型〕 半紙本三卷三冊。天地二二七ミ。

〔作者〕 小町雄八（玉川）作。長谷川五平・亀田綾瀬・石川雅望（六樹園）序。酒井履信跋。

〔年代〕 文政十一年（一八二八）八月、長谷川五平序。同年一〇月、亀田綾瀬序。同年七月跋。文政二十二年一月刊。

〔江戸〕 本心堂蔵板。河内屋太郎兵衛（奎文閣）売出。

〔内容〕 晩年に上総・下総など関東各地で平易な教えを説いた小町玉川の道話をまとめたもの。全三卷一四章からなり、上巻に「父子」「君臣」の二章、中巻に「夫婦」「兄弟」「朋友」「士」「農」「工」「商」の七章、下巻に「学習」「経済」「釈教」「旅困」「養生」の五章を収録する。このうち、上巻「父子」章と下巻「学習」章では主に子育てについて論じている。「父子」章では、まず「五倫」や「父子」の要点を述べた後、慈悲心で子どもを育てることが父の道であり、幼時の教育如何で子どもの善悪・吉凶・禍福一生涯が決まるのでこの時期を粗略にしてはならないと戒める（ただしこの時期を過ぎても、本人の努力や素質によって教育が行き届く可能性もあるとする）。続けて、子どもが不善人になるのは父母が教育法を知らないからであるとし、子育ての要点として「子どもに嘘をつかない」「幼時のうちに教育せよ」「子育ては何事も老人に相談し人事を尽くせ」「師を選び、師に贈る金銭等については子どもに語るな」等々を説く。また「学習」章では、学習・学問・礼の字義や素読法について述べる。

〔備考〕 全冊を収録（上巻「父子」章と下巻「学習」章のほかにも育児思想に関する記述が散見される）。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】『日本経済叢書・一九』『日本経済大典・二九』。『子育ての書・二』は抄録。【影印】なし。

施印 聞驚都計子（せいん ぶんきょうつけこ）

〔異称〕 書名は外題による。首題「小児共歌舞伎真似冒類声に驚く」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二七ミ。

〔作者〕 五損道人作。

〔年代〕 文政十三年（一八三〇）八月作・刊。刊行者不明（施本）。

〔内容〕 主に子どもへの風教の観点から子育ての要点を説いた教諭書。本文より地域の庄屋・組頭等に配布された施印本と思われる。冒頭に「今驚き聞ものは、秋風蕭颯の声にあらず。門前・土橋のほとりにて小児共声高く歌舞伎・芝居の真似、罵遊ぶなり。不教して如斯風化の習ひ速なる歟」と述べ、驚の子も良い親鳥に付けると親鳥に似て良く鳴くが、野鳥に付ければ野鳥のように鳴き、馬も育て方で駿馬にもなれば、荷付馬にも役立たない駄馬となることから、幼少時からの教育の重要性を説く。その子育ての要点は、まず良い人を見習わせることで、常に交わる友と親の行状が重要で、日用諸行の善し悪しは十中八九、友と親に似るとする。また「親の風儀よければ子に移り、其風儀代々の風儀となる。家風なども先祖の遺風なり」と述べ、農家・町家でも先祖の風儀を受け継いで繁栄している家も多いが、時には心得違いの子孫が主となって先祖以来の「仕来り」を改め、己の器量に自惚れて家業の障りとなる酒浸りや遊芸に明け暮れて遂に家を亡ぼす輩もいるように、このような遊楽の傾向は一人から一村に、一村から隣村へと次々に広がっていくと戒める。さらに、芝居を無常の楽しみとしなくても、五節句や年中行事など節目節目の楽しみがあることを述べ、子どもには「富栄ゆべき善き道」を見習わせ、聞き習わせて、家内和睦・家業出精を心掛けさせよと諭す。後半には小児養生を教えた「善き事は誰も知りたる事にありといふ、其大切な事」などの記事を載せる。

〔備考〕 全冊を収録。裏表紙見返しに『豊西史談』特輯「塩谷大四郎」中「塩公事歴要覧」の条に……同（文政）

一三年八月一五日。文政一三（年力）御教示『聞驚都計子』……とある」の書き入れがある。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】なし。【影印】なし。

養生一言草（ようじょうひとことぐさ）

〔異称〕 書名は外題による。見返題・序題・尾題とも同じ。首題および柱題「養生一言艸」。

〔書型〕 中本一冊。天地一三一ミ。

〔作者〕 八隅景山（立翁・中立）作。葛飾北秀画。

〔年代〕 天保二年（一八三二）一月序・刊（『国書総目録』によれば文政八年（一八二五）初刊）。〔江戸〕山城屋佐兵衛板（後印）。

〔内容〕 幼児から成人、老後までの養生について、衣食住を始め、遊戯・学問・武芸・芸能・医療や心の持ちよう、温泉・旅行・年中行事など幅広い視点で論述した養生論で、子育てに関する記述を多く含む。序文で「命は天に在て、寿は天に非ず。是以、養生は尽ずんば有べからず」と養生の必要性を説き、冒頭で「養生の大意」として「老人を尊ぶ」「老いを養う道」などを故事を引きながら述べ、続く本文で「小児玩」―「手習」「学問」「諸礼しつげがた」「弓」「馬」「水練」「水馬」「居合」「劔術」「鎌並ニ手裏劔」「柔術」「取手」「相撲使・角抵・膂力」「鉄砲」「能・謡」「養生手引歌」「飲食」「日用食物歌」「服薬・医師」「灸」「小児食事」「老人」「衣類」「武芸」「居所」「温泉」「高山」「旅行」の各項について説いた後、「年中養生」と題して各月の年中行事と養生の関連について述べる。

〔備考〕 全冊を収録。見返しに「千鐘房（須原屋茂兵衛）」と記す。なお、見返しに「初篇」と記すが、本書の続編は刊行されていない。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『日本衛生文庫・一』。〔影印〕なし。

養生女の子算（ようじょうめのこざん）

〔異称〕 書名は外題および序題による。首題「養生めの子ざん」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二五ミ。

〔作者〕 辻慶儀（忠郎兵衛）作・序。

〔年代〕 天保四年（一八三三）六月跋・刊。〔京都〕著者蔵板。

〔内容〕 天寿（天然の寿・天然の福祿寿）を全うし、天寿を少しでも伸ばすための工夫や心得を論じた教訓書。著者によれば三〇歳の天寿を八〇歳に伸ばすことはできなくても、四、五〇歳に伸ばす秘訣はあるとし、それを心・身・食事の養生に分けて説く。「心の養生」とは誠の志と正しい心を持つように努め、身勝手をせず天理に従うこと、具体的には先祖と親の心を己の心とすることとし、「身の養生」は「根気八歩（生まれ付きの根気・力量の八分を用いること。根気・力量を十分に使うことは血気を損ない寿命を縮めるとする）」を守ることや、労働も程よき位にし、耳目口鼻と女色を慎むべきこととする。さらに「食養生」では腹八分を守り、美食・大食・大酒を慎むべきことなどを教える。特に「天祿」として一生に食べる食事は定まっており、大食すれば短命となり、少食であれば食いつ延ばして長命となると述べ、さらに「長寿の女の子算」として五〇年の天祿高を七二石と仮定して、毎日三合半ずつ食すれば五七歳余、三合ずつ食すれば六六歳余、二合半ずつなら八〇歳、二合ずつなら一〇〇歳を保つことを説いている。また後半の「附録」では、年に一〇貫目の収入に対し八貫目で暮らすように努めれば、五〇年間で五八〇貫六六〇匁二分の貯蓄ができるなどの計算例を示す。本書は現代人的視点の健康法に多く触れないが、前掲『養生一言草』を見ても分かるように、江戸時代の養生観の広さを示す一例であろう。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕『江戸時代女性文庫・四三』。

四徳配当抄（しとくはいとうしょう）

〔異称〕 書名は外題及び首題による。柱題「四徳」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二五ミ。

〔作者〕 辻慶儀（忠郎兵衛）作。

〔年代〕 天保九年（一八三八）五月刊。〔京都〕著者蔵板（施本）。

〔内容〕 天理かつ人の道である元・亨・利・貞の「四徳」に従って生きることが立身出世・家業繁昌・子孫繁栄など幸福へ至る近道であることから、この四徳に基づいて生涯の生き方を論じた教訓書。人生六〇年を元・亨・利・貞に合わせて一五年毎に分け、さらに一徳を五年毎に「始・中・終」と三分割して、その時期をいかに生きるべきかを説いており、その前半部（一五歳まで）に子育ての理念が述べられている。まず五歳までは、父母と付添人で子の善悪が決まるとし、特に親が奢らず、よく慎み、質素を守り、何事も仁心で接し、殺生しないようにせよと親の心得述べる。さらに一〇歳までの五年間は子どもが智恵付く時期であり、癖の多くはこの時期に決まることから、姑息の愛をやめて厳しく仕付け、長幼の礼や行儀、質素儉約を教えよ、ただし子どもへの打擲をしてはならないと説く。また、六、七歳からは粗服を着せて手習いを、さらに八歳からは読書・算盤をさせ、一〇歳までは行儀・手習い・読書・算盤の四つを昼夜の業とさせよと述べる。さらに、一五歳までの五年間は「生涯の落着」、つまり一生を決める大切な時期であり、我が子を奉公人同様に扱い、合間に手跡・読書を習わせ、謡を少々嗜む以外の遊芸は無用とし、一四、五歳からは家業に専念させよと説き、以下、五年毎の生涯指針を順々に教える。なお、表紙見返しには「此書毎月朔日より七日までの内二日をきはめ、怠りなく御覽被成候へば、格別の利益有之候」と刷り込まれている。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】なし。【影印】なし。

嚶鳴館遺草（おうめいかんいそう）

〔異称〕 書名は外題による。見返題・目録題・首題・尾題とも同じ。

〔書型〕 大本六卷六冊。天地二五八ミ。

〔作者〕 細井平洲（徳民・甚三郎）作。細井徳昌編・跋。

〔年代〕 天保六年（一八三五）二月跋・刊。〔江戸〕嚶鳴館蔵板。

〔内容〕 本書は、第一卷「野芹」、第二卷「上は民の表」「教学」「政の大体」「農官の心得」、第三卷「もりかがみ」「対人之問忠」「建学大意」、第四卷「管子牧民国字解」、第五卷「つらつらふみ」、第六卷「花木の花」「対某侯問書」および付録「与権世儀手簡（先師平洲先生国牘）」から成る。第三卷「もりかがみ（毛里鏡）」は「輔儲大意」とも言い、まず、草木の成長に譬えて育児の始・中・終という育児の基本から説き起こし、教育者の善悪・邪正を選ぶ「択師」の重要性や世嗣（世子）教育の要点を述べる。第五卷「つらつらふみ」は「君の巻」と「臣の巻」に分けて説いた教育論で、前者では貴賤の子育ての違いや幼君教育のあり方を論し、後者では貴人が陥りやすい「御書院講釈」等の弊害に触れながら貴人の学問や良師・良友との関係を述べ、上下の交流には上からの「先施」が肝要で、下臣に対する態度など家老としての心得を説く。

〔備考〕 教育論を述べた第三卷・第五卷の全てと第一卷序文、第六卷跋文等を収録した。なお『嚶鳴館遺草』は平洲没後、門人らによって文化五年に漢文、天保六年に和文で刊行された。第五卷「つらつらふみ」も二卷二冊の単行本（享和元年序・刊）がある。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】『日本道徳教育叢書・一』『近世後期儒家集（日本思想大系四七）』『嚶鳴館遺草（小西重直校、一九四四年、宮越太陽堂書房）』『平洲全集』『世界教育宝典』『日本経済叢書・一五』『日本経済大典・二二』『日本倫理彙編・九』『子育ての書・二』は抄録。【影印】なし。

新鐫絵入

養育往来

（しんせんえいり　よういくおうらい）

〔異称〕 書名は外題および首題による。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二〇ミ。

〔作者〕 小川保麿（玉水亭）作・書・序。

〔年代〕 天保一〇年（一八三九）三月書・序。天保一五年一月刊。「大阪」秋田屋市兵衛板。

〔内容〕 子育ての重要性に鑑み、「幼稚を撫育道の種々、古人の金言を拾ひ輯めて」綴った往来。『劉向列女伝』による胎教から、出生後の養育（乳母の選び方、植木に喩えた育児の秘訣）、児童の家庭教育・躾、寺入り後の諸心得や質素儉約・信仰心・家職・礼儀作法までを教える。例えば、「子どもは善惡ともにうつりやすく、育て方でどのようなにもなる。一生の賢愚得失は幼児で決まる」「八歳から行儀作法を教える。出入・食事・就寝・来客時等のお辞儀をきちんとさせ、嘘を言わず、食べ物に卑しくないようにさせよ」「親と師匠が同じ心（厳しさ・慈愛）で教えることが大切」「子を養って教えないのは父の過ち。教えても子どもが立派に成長しないのは父の教えが至らないから」「親自ら衣食住の質素儉約に徹し、朝は早く起こし、神仏を拝ませ、夜は遅くまで家業を教えよ」「子どもの横着や非行は絶対に許してはいけない。最初からの習慣で、親の厳しさにも子どもは慣れるもの」などのように、教育する親や師匠の立場から説かれたものが大半で、「たとえ親の教えがなくても、子どもは孝行を尽くすべき。親が非道でも見習わずに、ひたすら孝を尽くせ」のように直接子どもに向けた心得はむしろ例外的である。このほか、国法・家法の遵守、朋友や遊芸、女子教育、家庭教育の重要性と親の責任を縷々論す。なお、巻頭に孟母・楠木正成妻の故事、本文注にも関連の記事や挿絵を載せる。

〔備考〕 全冊を収録。参考までに、嘉永元年（一八四八）再刊本の一部も掲げた。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『子育ての書・三』。〔影印〕『往来物大系・四一』。

こそだて草

（こそだてぐさ）

〔異称〕 書名は外題による。見返題・序題も同じ。首題「こそだてぐさ」。尾題「こそだて草」。

〔書型〕 大本一冊。天地二五〇ミ。

〔作者〕 小池貞景（丈吉）作。

〔年代〕 弘化四年（一八四七）一〇月序・刊。明治初年後印。「東京」近江屋半七板。

〔内容〕 巻末広告に「此書は幼児を婦人の朝夕に教訓すべき、そのすべを貝原氏の著述風に習ひて書れたるものにて、面白き胎教の説あり」と紹介するように、主として婦女子のために綴った神道系の育児書。まず子育ては父母の教え次第だが、特に母親は、誕生から四、五歳までの幼児に最も強い影響力を持つのであり、父親の教育が子どもに及ぶようになるのは七、八歳以後である、従って、まず母親がしっかりと教えることが肝心で、「三歳児の魂百まで通る」という俗諺の如くであると述べる。さらに、人間の魂は本来神の賜で教えがなくても自ずと善なるものだが、俗世間の「凶惡」に交わることで善が失われていくので、神から与えられた「本つ性の真意」に背かないようにと教えることが大切であると説く。以下、母自らが心を正すこと、胎教の大切さ、子どもの病の原因になりやすい食事や菓子・果物の与え方、小児の叱り方や機嫌の取り方、可愛がりすぎてやたらに抱っこやおんぶをしないこと、五、六歳になったら食べ物を残すほど与えないこと、金魚・蛭・蟋蟀などの生き物を玩ばせないこと、男は算筆、女は縫い針を仕込まないと一生の損だが、本人に向いていなければ強いて仕込むべきではないこと、粗服を着せて儉素に馴れさせることなど、具体的かつ平易に説いている。

〔備考〕 全冊を収録。作者は神職・国学者で、文化七年（一八一〇）生まれで明治一二年（一八七九）に没した。大原野神社権宮司で、明治九年に往来物『教則千字文』を著している。

〔底本〕 小泉吉永旧蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『教の園・下』。〔影印〕なし。

子孫繁昌手引草（しそんはんじょうてびきぐさ）

〔異称〕 書名は外題および首題による。

〔書型〕 大本一冊。天地二六二ミ。

〔作者〕 作者不明。

〔年代〕 文久四年（一八六四）三月刊。〔？〕金山万市ほか板。

〔内容〕 『子孫繁昌手引草』は作者未詳の間引き防止教諭書で、江戸後期から明治初年にかけて各地でたびたび板行されている。収録書は文久四年板で、跋文に「御上より結構之御書を以御諭し被下置候：然処、一ト通り御書物御渡しに相成候へ共、尚又、銘々共より奉願上、御判拝借いたし摺渡し候間、何卒人別一同申合必邪心強欲ニ不陥候様、御主意可奉専事ニ候」とあるように、もともと領民啓蒙のために上梓された板本の板木を借用して金山万市以下の有志によって再版された施本らしい。ちなみに平凡社・東洋文庫『子育ての書』に収録された天保五年（一八三四）板も信州小諸の篤志家によって再板されたもので、『子孫繁昌手引草』は公私双方の善意による藩板や施板で諸国に広まった。間引きの罪の重さと子育てのあり方を論し、間引き防止の功德を強調しつつ、地域・近隣での間引き防止に努めるように呼びかける。さらに巻末には、赤子の口を手で塞ぎ、赤子の腹に膝を載せて圧死させんとする「子返し」の図と、それを行う女性の心の姿を印象的に描いて、これが間引きをする者の「真の姿」であると戒める。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕『子育ての書・三』。〔影印〕『江戸時代女性文庫・五七』。

佐登し具斜（さとしぐさ）

〔異称〕 書名は外題による。見返題「佐登し具斜 一名増蔭乃記」。首題「論草」。柱題「増蔭記」。また、跋文中に「さとし草」と記す。

〔書型〕 大本一冊。天地二五八ミ。

〔作者〕 中村智済（勸農衛・玄順・元順）作。小山武岑（権八郎・門喜・閑山）跋。

〔年代〕 嘉永四年（一八五一）一月刊。〔下野国芳賀郡〕谷田部・茂木役場蔵板。

〔内容〕 谷田部藩七代・細川興徳に登用されて財政立て直しなどの藩政改革に当たった藩医・中村智済が著し、谷田部・茂木両役場が出版した間引き防止教諭書。見返しに「頒布毎戸」とあり、領民に普く配布した施本であろう。冒頭で「天然至らざれば、ねがひもとむとも、私に産事ならず。さるにより、もとめざるに出来ことあるは天のしからしむる事なれば、この処を能々弁へ、天の冥慮に違はざる心がけこそ人倫の本意なれ」と述べ、子どもが天からの授かり物であること、しかしながら子どもを間引くのは禽獣にも劣る行為であること、その行為が後々及ぼす影響について論ず。また、「我産し子なれども我子ならず、神仏より預け置れしものと心得て養ひ育て、幼より善き事を教へ、あしき事を見ならはせざるやうに成長るまで何事にも心をつけ守り育て、天地・神仏への御恩を報ぜん」と心がけてこそ万物の長とはいふべけれどと説く。末尾では、過去七年間、若い男女に「縄なわせ」や「糸織り」の夜業をさせた収益で、地域の病難者や貧困者を救ってきたが、その返納金を養育料にあてて間引き防止策とした旨を記す。

〔備考〕 全冊を収録。幕末の谷田部藩は相次ぐ天災・凶作、また江戸藩邸焼失等により藩財政の悪化が極限に達し、

天保四年（一八三三）には年貢減免の百姓一揆も起こり、天保五年には一二万七〇〇〇両という莫大な借金を抱えた。そこで八代藩主・興建は中村智済を通じて二宮尊徳の指導を受けて改革を行った。藩政改革は興建の死去などによって短期間で頓挫したが、それまでの借金をほぼ返還し、天保七〇八年の大凶作でも領民から餓死者を一人も出さなかったという。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕なし。

愛育茶譚（あいいくさん）

- 〔異称〕 書名は外題および見返題による。目録題・柱題・尾題「愛育茶談」。
- 〔書型〕 大本一冊。天地二六〇ミ。
- 〔作者〕 桑田和（立齋）作。内藤貞庵・赤柴立策序。永海画。
- 〔年代〕 嘉永六年（一八五三）春刊。刊行者不明。
- 〔内容〕 種痘の実施や啓蒙活動に尽力した江戸深川の小児科医である著者が「愛育総説」「臍帯」「拭口」「浴児」「児衣」「始乳」「撰乳」「代乳」「剃頭」「調治」「離乳」の十一章に分けて述べた育児書。表紙見返しには「本書は小児養育の真理を万人が理解するためであり、近年は牛痘が行われて大厄を免れるようになったものの、親の子育ての間違いから種々の病気になったり、早死にするのは嘆かわしいことである。だから、本書を熟読して、目先の愛（姑息の愛）に溺れ子孫を害することがないようにせよ」と戒める。本文では「都会では名医が揃い、高価な薬も満ちあふれていて一つも不足がないが、医薬が乏しい田舎の子どもの方がかえってよく育つ」として育児環境に言及したり、「貧家の幼児は号泣しても大人が構わないために、自ずから手足を動かして健やかに育ち、また自然三分の飢寒を得るために生理になつてよく育つものが多い」とか「幼児は一二月頃より常に立ち歩きを練習させ、自分で立つようにさせよ。この時期の立ち歩きが足に良くないというのは俗説であつて、この時に歩くことを習わせれば、三歳頃には二里程の距離を歩かせてもくたびれない。子どもが駆け回ったり踊ったり跳ねたりすることを好むようになれば、自然と健康になる」のように具体的な育児法を展開する。なお、本書の随所で「健康」という言葉を使用しているが、当時、あまり一般的でなかった「健康」という言葉を頻繁に使用している点は興味深い（緒方洪庵の『病学通論』（嘉永二年刊）の影響か）。また底本は丹色表紙であるが、表紙の色は「赤絵」同様に子ども魔除けの意味を込めたものだろう。
- 〔備考〕 全冊を収録。
- 〔底本〕 小泉吉永蔵。
- 〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕『江戸時代女性文庫・五七』。

養育教諭（よういくきょうゆ）

- 〔異称〕 書名は外題による。
- 〔書型〕 半紙本一冊。天地二二八ミ。
- 〔作者〕 関口豊種作。
- 〔年代〕 文政六年（一八二三）作。安政二年（一八五五）一月再刊。「不明」阿部庄右衛門・田家又左衛門施板。民間の有志によって施印板行された間引き教諭書。冒頭に「子を戻すことは、いかなる事情があるにせよ、決して行つてはならない行為である。なぜなら子どもの誕生は人間の仕業とばかり考えるのは間違いで、神道では産の霊がなし給うとし、儒道では天より与え給うとし、仏道では諸仏の力で出生すると説かれてゐるからである。従つて間引きは、あらゆる教えや神仏に背く行為である」と厳しく戒める。続いて「貧しさのあまり子を育て難ければお上に申し出よ」「貧しいものは分相応に悪衣・悪食を恥と思わずに子を育てよ」「子沢山を恥のように思い、さほど貧しくもないのに育てないのは言語道断である」「双子や三つ子を他人が批判したり、本人が恥じて包み隠し、一人以外は育てないのも愚かなことである」「年子で、乳離れしていない兄が不敏で、生まれたばかりの弟を戻すこともあつてはならない」「さらに愚かなことは、成長した子どもが結婚した後で親に子どもが出来た場合、世間体から子を戻すことがあるが、老いて子どもが出来たことは恥ずかしいことではない」「取り上げ婆（産婆）たる者は間引きを頼まれても引き受けてはならない。むしろその夫婦に教え諭して子育てを促すべきで、なおも承知しないのであれば村長へ伝えて村長から諭してもらえ」等々を主張する。末尾では、ここかしこで間引きが行われている現実を見て「胸ふさがり、涙さへはふり落て、あさましくもくちおしくも是を忍ぶべくんば、いづれをか忍ぶべからざらん」との思いを切々と述べ、「間引きは地域の恥、地域の恥は村長の恥、役人の恥であり、ひいては君上の恥となる」と結ぶ。間引きの実情や背景が分かる点で興味深い資料と言えよう。
- 〔備考〕 全冊を収録。
- 〔底本〕 小泉吉永蔵。
- 〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕なし。

捨子教誡乃宇多（すてごきようかいのうた）

〔異称〕 書名は外題による。見返題「捨子教誡の宇多」。柱題「捨子教誡誦」。首題「捨子教誡乃誦」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二三ミ。

〔作者〕 橘義典（錦水）作・跋。念一苔洲・湛然序。精齋学人跋。

〔年代〕 安政四年（一八五七）一月作。同年三月、湛然序。同年七月、苔洲序。安政五年二月、精齋学人跋。文久元年（一八六一）一〇月刊。〔京都〕鈍齋藏板。菱屋友七ほか板。

〔内容〕 「世に哀れなる挙動は、片田舎なる風俗とて、其身貧しき世渡りに、生れくる子を悉く、育てん事のならぬ故、不便ながらも捨にきと、いへば一往理はりの、有に似たれどさにあらで、無慈悲なりける限りなり：」のように七五、七五と続く暗誦しやすい美文で、捨て子や間引きを重々戒め、我が子を精一杯育て上げるべきことを主として仏説に基づいて論じた教訓。巻頭に山上憶良・藤原兼輔の名歌と捨て子禁制・養育義務の高札を掲げた後、所々教訓画を挿んだ本文を載せ、末尾に「捨子教誡乃誦附録」として門徒向けの教訓書『宗徒用心』下巻一二〇章からの抜粋を収録する。胎児が生まれてくる時の苦しみや、天地の形や神仏の姿を備えた赤子を殺す罪の重さや禽獣にも劣る行為たること、そのような極悪非道に対する報いを述べ、あるいは間引き・捨て子に及ぶ事情を戒め、あるいは丙午の俗説を否定し、さらに、出生は人力の及ばぬ深き因縁によること、自らも父母に限りなき苦労をかけて養育されたことを思うべきこと、捨て子・間引きによる家運衰微や子孫断絶を避けて善事をなすことなどを説く。「附録」も七五調で綴った同様の教訓で、慈悲、殺生、因果応報、陰徳等の仏説に加えて、正直、子育て、法度遵守、家業出精、孝行などの通俗心得にも言及する。なお跋文には、大人から子供まで、また、仏縁のない読者にも広く啓蒙することを意図して本書が編まれたことを記し、本書普及のための施印を呼びかけている。

〔備考〕 全冊を収録。なお、作者は出雲国安来（安城）・徳応寺の住職で、脱稿時四二歳であった。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文獻〕 【翻刻】『子育ての書・三』は抄録。【影印】『江戸時代女性文庫・五七』。

教訓

新女大学要鑑（きょうくん しんおんなだいがくようかん）

〔異称〕 書名は外題および見返題による。首題「新女大学」。

〔書型〕 大本一冊。天地二六二ミ。

〔作者〕 白崎堯谷（竜走軒）作・書。

〔年代〕 慶応二年（一八六六）四月刊。〔江戸〕大和屋作次郎（衆芳堂）板。

〔内容〕 『女大学宝箱』の編集形態に倣い、年代別あるいは生涯にわたる女性心得を四八カ条の壁書で綴ったもの。最初の第一〜一六条は、誕生・幼児より五、六〇歳までの各年代順の女子教訓で、第一条「六、七歳までの男女同様の教育と母親の教育上の責務」、第二条「七歳からの男女の別」、第三条「七〜一二歳頃の読み書き学習」、第四条「一二歳からの手業（女工）」、第五条「婚姻までに身につけるべき教訓や教養」、第六条「結婚の意義」、第七条「婚家の法式・法度」、第八条「舅姑への孝養」、第九条「夫婦の道や妊娠中の身持ち」、第一〇条「懐胎中の心得（特に胎教）」、第十一条「怪気の戒め」、第十二条「嫁入り時の衣食等の心構え」、第十三条「内治と物見遊山・外出の戒め」、第十四条「婚家の生業への出精」、第十五条「四〇歳は老いの初めと自覚すること」、第十六条「五〇、六〇代の女性の戒め」までを比較的長文で綴る。さらに後半の第一七〜四八条で、「子として親に背く事なかれ」「女として男に勝つ事なかれ」のように当代の女性に求められた種々の心構えを箴言風に綴る。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文獻〕 【翻刻】なし。【影印】『稀観往来物集成・二三』『女大学資料集成・四』。

啓蒙 健全さとし（けいもう けんぜんさとし）

健全さとし

〔異称〕 書名は外題による。首題「啓蒙 健全のさとし」。見返題「童蒙 健全さとし」。柱題「健全の論し」または「健全の教」。尾題「健全諭」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二二三ミ。

〔作者〕 坂本秀岱作。村田海石（邨田浩蔵）書。横尾謙序。

〔年代〕 明治六年（一八七三）七月官許、同年十一月刊。〔大阪〕田中太右衛門板。

〔内容〕 健康管理・養生についての心得を記した明治初年の和装本教科書。序に「一身を健全にするは最も重んずべきこと」であるが、世間ではそれを忘れて「暴飲大食^{なんじ}杯して大切なる一身を度外に置く」者が多く、忠孝を実践するための根本が身の健全であること、一身の健全が天下の健全たることを述べる。本文ではまず、志を成し遂げるには身体の健康が最も重要であり、養生第一の生活を心掛けよと述べ、続いて、食物・食生活など二〇カ条に及ぶ健康心得（新鮮な食物を選ぶこと、生よりも煮て食べるべきこと、硬いものよりも柔らかいものを選ぶこと、肉類・魚類・果実類の選び方、少食・粗食のすすめ、ゆつくり食べること、食事と運動に間を置くこと、飲料と食物を適宜にとること、飲料としての水、菓子類と消火の関係、喫煙、飲酒、運動、頭を使うこと、衣服・居宅の清潔、入浴・行水、疲労時の注意や休養、換気等）を列挙する。また巻末に「猥^わリニ薬ヲ服スベカラザル事、并ニ医者ヲ撰ムベキ事」の記事を載せる。

〔備考〕 全冊を収録。本書は純然たる育児書ではないが、明治期の小学校における健康教育の一例として掲げた。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕なし。

幼稚論第一輯 脩身往来・体操往来（ようちのさとしだいいつしゅう しゅうしんおうらい・たいそうおうらい）

脩身往来・体操往来

〔異称〕 書名は外題による。見返題「幼稚さとし第一輯」。柱題「脩身往来」または「体操往来」。

〔書型〕 半紙本一冊。天地二〇八ミ。

〔作者〕 中村喜平作・刊。

〔年代〕 明治初年刊。〔金沢〕中村喜平（知新堂）板。

〔内容〕 前半の『脩身往来』と後半の『体操往来』から成る往来物。それぞれに往復書簡風に綴った序文を付す。『脩身往来』は「脩身の、学は何そと、言ふなれば、銘々持し、本然の…」で始まる七五調の文章で、「修身」の字義から要旨、修身のための努力（学校での学習）とその目標（親や国家への報恩）を説く。『体操往来』も同様に、「体操」の字義から身体鍛錬の心得を七五調の文章で綴ったもので、富国強兵のためにも身体を堅固にする日常の努力の大切さ、貴賤・男女の差別なく生涯を通じての体操の必要性、子どもの遊戯や音楽が身体訓練に役立つこと、体操せずに学習するだけの柔弱者であってはならないことなどを論ず。子育てについては後半の『体操往来』で、赤子に教える「かぶく」「てうち」「あはく」などや幼児期の遊戯も筋肉や関節を鍛える運動になるのであり、日本にも昔からこのような「体操」が行われており、諸外国に劣るものではないと述べ、さらに三、四歳の幼児から六、七〇歳の老人まで適度な体操が必要なことを説きつつ、毎日朝から晩まで手習いや学問ばかりさせては柔弱者にさせてしまい、教育が行き届かない結果になると注意を呼びかけている。

〔備考〕 全冊を収録。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 〔翻刻〕なし。〔影印〕『往来物大系・四二』。

神国幼童おしへ草（しんこくようどうおしえぐさ）

〔異称〕 書名は外題による（題簽題「神国幼童おしへ草 附孝行和讃・因果和讃」）。序題「神国幼童教艸」。首題・尾題「神国幼童おしえ艸」。

〔書型〕 中本一冊。天地一五五_ミリ。

〔作者〕 存統和尚作。宇田総兵衛（大村屋総兵衛）編。琇宏（勲誉）序。

〔年代〕 明治二六年（一八九三）一月序、同年二月刊。「東京」宇田総兵衛（大村屋総兵衛）板。

〔内容〕 「諸法実相の眼」をもつて見れば、あらゆる言葉に真理が含まれるとの考えから、「ちやうちく」「あわく」「あたまでんくよ」など一三の幼児語を掲げて、仏教的または儒教的な解釈を加えたもの。各頁に家庭での幼児の姿態を描き、上欄に幼児語とその説明を置く。説明の内容は、例えば「にぎぐれろく」の「にぎ」は「仁義」で、「れろ」は「礼に居れ」を意味するといった牽強附会に近いものである。子育てに関する記述はないが、各丁の挿絵には当時の幼児が家族と戯れ遊ぶ様子がいきいきと描かれている。

〔備考〕 全冊を収録した。なお、巻末に「孝行和讃」と「因果和讃」を収録する。

〔底本〕 小泉吉永蔵。

〔文献〕 【翻刻】なし。【影印】なし。